狭山

【狭山池】　驛の南五丁、日置莊村にある。今から二千年前、崇神天皇の朝、附近田畝灌漑のために開かれた池で、實に我國水利工事の始をなすものである周圍三十二丁、今に尙ほ附近の地はその恩澤に浴してゐる。池には蓴菜ができるので名高い。

瀧谷

【與通大師】　驛の西六丁、天野村小山田にある眞言宗の寺で、本名を【盛松寺】といふ。この寺の本尊厄除弘法大師が名高い。境内に新四國八十八ヶ所の靈場が設けられてあるので參詣者が多い。

【鉢峰寺】　驛の西約一里、上神谷村鉢ヶ峰にある。法道上人の開いた古義眞言宗で上人は播州の法華山からこの山へ移つて修行してゐると、法華山に殘して置いた佛具佛像寶鉢の類、一時に空中を飛び來つて上人の室に入つた、そこで此寺を建てゝそれらの佛具佛像を安置したといふ。昔の事だから播州河内間の無着陸飛行といふ

ので寺も建てもらへたが今ならたかゞガソリン代に二三百圓貰へる位なものだ。

【瀧谷不動寺】　驛の東方にある。詳しくは大阪鐵道瀧谷不動驛參照。

長野

【長野遊園地】　驛の東に近く一帶約三萬坪の地を開いて遊園地にしたもので、もこは諸越長者の舊趾であつたといふ。地は石川の美しい流れに臨んだ丘の上にある。樹木泉石、すべて天然をそのまゝ利用してあるので極めて閑雅幽邃な風致をそなへてゐる。それに料理店、茶店旅館等の設備も完備してあるから一日の遊樂には最も適當してゐる。またこの地は杜鵑に名のある所だ。遊園地より南約八丁三日市に【錦溪温泉】がある。秋は紅葉の美しい所だ。

【觀心寺】　驛の東南二十五丁、川上村寺元にある。弘法大師の高弟實慧上人開基の眞言宗の寺で、後に楠公の菩提寺になつた。境内に【楠公首塚】がある。また同じ境内に【後村上天皇陵】がある。天皇は正平年間吉野からこの地に移らせ給ひ、こ

の寺を行在所として遂に崩御あらせられた。當時の御遺蹟が今尙ほ寺内に現存してゐる萬乘の御身を以てかゝる淋しき山間に崩じ給ふた御境涯は拜察するだに畏き極みである。この寺の附近は全山老樹蓊鬱として晝猶ほ暗き幽邃の地であるが、梅、櫻、楓などが頗る多いので、春の美しさは勿論、特に秋の紅葉は近畿でも名高い地である。又山中に【紅葉瀧】【戊亥瀧】【雄瀧】【雌瀧】等の瀧があるので夏の避暑にも極めて適好だ。

【延命寺】　觀心寺の南、鬼住村にある。この境内も亦櫻楓等で名のある所で、殊に紅葉は毎年他よりも早く美しい色を染出すので名高い。域内に【紅葉庵】があつて遊客の休憩に便してゐる。

【河合寺】　觀心寺の西十八丁、河合寺村にある。寛保三年創建の眞言宗の寺で、本尊は楠正成の守本尊毘沙門天王を安置してある。境内に服部南廓の撰した楠公遺

河内觀心寺

河内觀心寺

高野電鐵の長野驛から大和五條へ通ふ縣道を一里ばかり行つたところ、鹿の子まだらに雪をかついだ高野續きの山々を仰ぎながら、緩い勾配をうね〳〵登つて行く途中は、まるで繪卷物にあるやうな綺麗な松山つゞきだ。觀心寺は楠公遺跡として人も知る。梅の名所にはなつてゐるが、それは門前に少しあるばかりだ、幽邃閑雅ないゝ處である。

愛の碑が建つてある。

【天野山金剛寺】　驛より西南一里、天野山の半腹にある。行基の開いた眞言宗の寺で、後白河法皇の時に勅によつて重修せられ現存の金堂、食堂、御影堂等が成就した延元元年後醍醐天皇の勅願所となり、正平八年には後村上天皇吉野よりこの寺に移りました。觀心寺に移らせ給ふまでは卽ちこの寺がその所在所になつてゐたので今の食堂は卽ちその御遺跡である。境内に觀月亭がある。後村上帝が觀月あらせられた建物で、唐破風の御殿造りになつてゐる。當時南朝に關する文書などは今に寺寶として存し貴重な史料になつてゐる。この寺の附近は松茸の名產地で、秋は遠近から多くの人が出る。

【光瀧寺】　金剛寺の西南方、高向村瀧畑にある、福王山と號する天臺宗の寺で、行滿上人の開基である。こゝの本尊は不動尊で、世に炭燒不動と稱して頗る名高い。

山中に四十八瀧がある。就中光の瀧、瓔珞瀧、千手の瀧など最も名がある。殊にこの山中は楓が多いので秋は非常に美しい。

【槇尾山施福寺】驛から西南二里、河内和泉の國境、槇尾山の奥にある。（前記瀧畑村から一里、これを裏道こいふ。和泉の横山村坪井から上ること約一里半、これを表道こいつてゐる。和泉の方の便宜驛は岸和田驛）この寺は光瀧寺こ同じく行滿上人の開基で、もこは眞言であつたのを寛文年間から天臺宗になつた。弘法大師も久しくこの寺に居つたこいふ。西國四番の札所こして名高い。山中は極めて幽邃で、如法嶽、卒都婆峰、捨身嶽などの名所がある外、滿願寺瀧、清水瀧等の瀑布があるので夏の避暑にはいゝ所だ。

千早口

【金剛山】　金剛山のこゝは河南線富田林驛の條に詳しく說いたから略す長野方面からの登山口は卽ち、千早口で下車して千早村に出るのである。

河内天野山

河内天野山

高野線長野驛から約一里、駒鳥や鶯が長閑な囀りを交してゐる松山添ひの道を緩い勾配に從つて登り降りして行く。大方は癈れ傾いた幾つかの坊舍や長く連つた白い土塀を圍んで凡てが花だ。朱の剝げた山門の軒、苔蒸した金堂の階段、又は多寶塔、觀月殿、御影堂などの蒼然たる古色に映じて、幾多の老櫻は昔ながらの春を繪つてゐる。閑庭晝靜にして落花を聽くといつたやうな趣、又繪巻物でも展げたやうな所だ。

紀見峠 【紀伊見峠】 河内と紀伊の國境にある峠で、長野三日市から紀州橋本に通ずる道である。この峠から紀の川、大谷を隔て、高野山一帶の山を望んだ景色は頗るいゝので名高い峠である。

橋本 【高野山】 伊都郡の南に盤踞してゐる山で、弘法大師の開いた金剛峰寺の靈域として名高いことはこゝに喋々を要せぬ所であらう。左にその案内の大略を記さう。高野登山によるべき便は高野電車と院線關西和歌山線(和歌山王子間)の二つがあるから登山者は便宜の線を選ぶべきである。登山口は橋本と高野口の兩方ある高野電車は橋本が終點であるが和歌山線には橋本驛の外に高野口驛があるから隨意に下車すべきである。本項は高野電車であるから橋本からの登山道を說かう(橋本より金剛峰寺まで約四里半)

橋本から南へ出ると【紀の川】がある。この川は吉野川の下流で、和歌山縣の北

部を横斷して和歌山市の北で海に注いでゐる大川である。この川の鮎は吉野川の鮎ここもに名高いもので、鮎狩は橋本の東から五條町附近の邊が頗る盛んである。(關西和歌山線五條驛參照) 大阪附近から五條附近まで出かけるのには、關西線で湊町から王子經由でゆくよりも、高野電鐵で橋本まで行つて、和歌山線にのりかへる方が、瀘車賃は四五錢高いが時間の都合がいゝ。

却說、紀の川を渡つて西約一里ゆくこ【學文路】に出る。その町はづれに【苅萱堂】がある。加藤左衛門尉重氏が遁世の跡を慕ふた石童丸の話で名高い所で、石童丸の母千里の墓や遺物こ稱するものがこゝにある。これから山路になつて約一里【河根村】に出るこ、丹河高野の兩神を祀つた【產土神社】こ、もここの社の別當であつた【日輪寺】がある。又河根川に【千石橋】こいふ釣橋がかゝつてある。そこから二十六丁、觀音堂の前に【觀音茶屋】がある。更に二三丁ゆくこ世に【黑石】

こいつて、道の兩傍に大きな岩の出ばつた所へ出る。こゝは明治四年の二月播州赤穗の藩士村上兄弟が父の仇を復した所で、我國の仇討の最後こいはれ、世に『高野の敵討』こ稱して名高い。附近にその墓がある。所でこの時討たれた敵も討つた村上兄弟の父も共に維新の志士で政治上の意見の衝突から事が起つたので、討たれた者の中には贈位にまでなつた者もある。過般その五十年忌が執行され討つた側の子孫も討たれた側の遺族も共に手を連ねて參拜した。そこを進むこ間もなく【神谷】へ出る。こゝは高野口からの登山道こ合してゐる所である。人家は百戸足らずの小村であるが高野登山道の要衝で、酒樓旅館等軒をならべ、宛然遊廓をなしてゐる所だ。この地の花屋こいふ旅館は弘法大師在世の頃から參詣人に花を賣るのが商賣で、今は旅館だが中古に酒造業に轉じたこいふので今に毎年の御影供には酒を大師の廟所に供へる例になつてゐるこいふ家である。神谷の町はづれに【太神宮】がある。こ

れから高野山の境域になるのである。神谷から新道と舊道とある。舊道には【四寸岩】といふのがある。止駿岩とも書く。道に横はつてゐる大きな岩石に幅四寸程の人の足跡に似た凹みがある。昔弘法大師がこれを踏み初めたといふので、今の人は親の足跡をふむと稱してこれを履んで登る。尤も履まなければむかうへ通れないやうな所へ出しやばつてゐるのだから、弘法大師もこゝから登つたとすれば履みもしたらう。またわざ〳〵に飛びこす程のしろ物でもない。今は新道の方が開けてゐるので、舊道の足跡をふんでゆくものが少い、尤も親の足跡などはふまない方がエライのさ。四寸岩から三丁ゆくと【極樂橋】へ出る。新道からもやはりこの橋へ出るこゝから上は古から山に手を入れた事がないので、杉檜など蠢々として聳へ蓊鬱として天を覆てゐるので眞に畫なほ暗い。橋から上が、高野登山道で最も難所といはれてゐる【不動坂】の峻坂である。坂の上に【萬丈ヶ嶽】がある。底も知れぬやう

な深い谷に臨んだ斷崖絶壁で、俗に萬丈轉し、又は千丈落しなどといつてゐる。むかし山内の罪人を簀卷にしてこの谷へ投げ落したさうだ。不動坂の頂上に【外不動堂】がある。明治十六年再建のまだ新しいものだ。そこから上へ五丁程登ると【岩不動】がある。路に臨んだ大きな巖に不動の種子を刻んであるがこれは弘法大師が爪でほつたものだといはれてゐる。熊の爪だつてさうはゆかない。岩不動から一丁ばかりに【兒が瀧】がある。その上が【花折坂】でそこを八丁ばかり上ると【女人堂】がある。往昔は高野山に女が入ることを禁じてあつたので、この堂を建て、女はこゝから遙拜することになつてゐた。明治五年太政官の布告でその禁が廢せられた。堂の前の黑門を潛るとこゝから【高野山金剛峰寺】の境内になるのである。

金剛峰寺は弘仁七年弘法大師が嵯峨天皇の勅允を蒙つて創立し承和二年三月二十一日を以てこゝで入寂した眞言宗の大本山として天下周知の事である。現寺域は總

坪數百三十三萬八千八百五十四坪、僧坊百三十餘ある。往古は更に大きなものであつたので、寺域七里四方に跨り一千餘の僧坊があつたといはれてゐる。女人堂から上つてゆくと金剛峰寺の本坊へ出るがこの道は實は高野山の表門へ出る本道ではないのである。元來この山の登山道は四つあるので、不動阪口、熊野口、龍神口、大門口の四で、高野山の表門へ達する正道は卽ち大門口の登山道である。これは和歌山から麻生津峠を越へ花折坂を經て大門へ來るのだが、瀘車電車の開けた今日ではこの路を選ぶものは殆ごない。卽ち今では不動坂口が表門道のやうになつてゐる。從つて不動阪から登るのは高野山の裏門から入つてゆくので表門は別にあることを承知せねばならぬ。境内の說明は順序として表門の方から始める。

表門は不動坂口から登つて境内へ入ると、十七丁も西南方に建つてある。これを【大門】といふ。高さ二十二間表行十五間、奥行九間、銅の瓦で屋根を覆ふた宏

壯な二重樓門である。寶永二年に再建せられたもので、佛工康意作の一丈五尺の金剛力士が左右にたつてゐる。大門から十五丁ゆくと【金堂】がある。御願堂ともいふ。これが高野一山の本堂である。高さ二十二間十三間四面の二層の高閣で創建當初のものは屢々燒けて、今の堂は萬延元年に再建せられたものだが頗る壯麗なものである。本尊は一丈六尺の藥師如來の坐像である。金堂の傍に高さ十六丈、十六間四面の、日本最初の寶塔と稱せられた【根本大塔】があつたのだが、天保十四年に燒けてまだ再建の運びに至らない。大塔の傍に【御影堂】がある。七間四面の寶形造で、弘法大師の像を安置してある。大師在世の折はその持佛堂であつた所といふ。今の堂宇は弘化四年紀伊公が檀那で建造せられたものである。御影堂の前に【三鈷松】がある。弘法大師が唐にあつて、歸朝の後寺を建つべき地を占はんが爲めに八祖相承の三鈷杵を明州といふ所から東に向つて投げた。するとその三鈷は遠

く東の空へ飛んで雲に沒したが、大師歸朝の後たま〳〵この山へ入ると、唐から投げた三鈷がこの松の樹にひつかゝつてゐて光明を放つてゐたので、卽ちこの地をもつて密敎修禪の靈地と定めたといふことである。蓋しまつ赤の大嘘であることも眞實である。但しこの飛行の三鈷杵といふのは今に傳はつてゐるので、日本海横斷はおろか、すぐ目の前の紀の川一つ飛び越しさうもないものだが、非常に古いもので今國寶に編入されてゐる。因に弘法大師がこの寺を開いた由來は、大師自身が嵯峨帝へ奉つた上表文に書いてゐるから左に記して置く（原漢文抄譯）

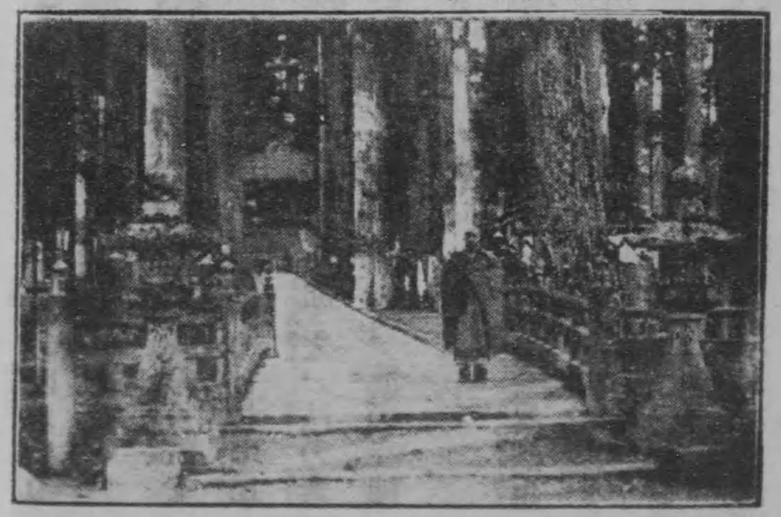
伏て惟るに歷代の皇帝佛法に心を留めたまひ、金刹銀臺朝野に櫛比す……法の興隆是に於て足るなり。但恨むらくは、高山深嶺は禪客に乏しく、幽藪窮巖は定賓の入ること稀なり。實にこれ禪敎未だ住所の不相應を傳へざるの致す所なり。今禪經の說に准ふに、深山の平地は尤も修禪に宜し。空海少年の日好みて山水を涉

覽。吉野より南行一日、更に西に向つて去ること兩日程にして平原の幽地あり名けて高野といふ。紀伊國伊都郡の西に當れり。四面高嶺にて人蹤蹟を絕てり。今、上は國家の爲め、下は修行者の爲めに、荒藪を芟り夷げて聊か修禪の一院を建立せんと思へり。經中誡あり。山河地水悉く是れ國王の有なり。もし比丘にして他の許さざるものを受け用ひば、卽ち盜罪を犯す者なり。加之、法の興廢は悉く天心に繫る。大小となく敢て自由にせず。望み請ふらくは、彼の空地を賜りて早く小願を遂げさせたまはらむことを……』

又附近に【西塔】がある。高さ九丈、方七間の寶塔で、弘法大師の入寂後、眞然僧正が大師の遺した圖記によつてこれを建てたといふ。この建物も天保五年再建の新しいものだ。金堂の南の方に【不動堂】がある。建久四年八條女院御願によつて建立せられたもので、現存山內の諸建物中最も古いもので、特別保護建造物になつ

てゐる。この堂は當時四人の工匠に命じて、各々その受持の部分を定め各部で各人隨意な設計や建築をさせたといふことで、堂の四隅一つ一つその構造がちがつてゐるから甚だ奇だ。金堂から二丁ゆくと【金剛峰寺】がある。それが卽ち高野山一山百卅餘坊を總轄してゐる所である。金剛峰寺と云へば高野山一山を總稱してゐる名で、この本坊だけの名ではないのであるが明治初年に本坊にこの名を冠せしめられた。この坊はもと開山第二世の眞然僧正の廟所であつたが、豐太閤がその母大政所のためにこの寺を

高野山御廟橋ヨリ萬燈籠堂ヲ望ム



建て靑巖寺と名けた。爾來累世の貫主の住寺となつたので、德川時代になつて敎義宗務所をこの寺と定めて、一山の宗務を管掌せしめた。これが卽ち明治になつてこの坊に金剛峰寺の名を冠せしめられた所以なのである。現に高野山の貫主寺である東西三十間南北二十五間、輪換の美を極めてゐる。但し今の建物は天保の火事に燒けて元治元年再建せられたものである。寺中柳の間といふのが今もあるが、もとの柳の間といふのは、關白秀次が石田三成等の讒によつて幽閉せられ、遂に自刄した室なのである。金剛峰寺の門前から南西に【六時鐘】がある。寬永十二年の鑄造、山内の時を報ずる鐘である。こゝから八丁東へ上ると【一の橋】がある。大門からこの一の橋までは道の左右を西院谷、南谷、一心院谷、五室谷、千手院谷、本中院谷、小田原谷、蓮花谷、東谷、の十谷に區別して、各僧坊がならんでゐる。何れも立派な寺院で、參詣者が依賴すれば宿泊を許してくれる。但し金剛峰寺だけは泊め

てくれない。一の橋から東は一面の大きな杉と檜の林で薄暗い道だ、道の左右には石塔が隙間もなくひし〳〵と立ちならんでゐる。中には豐太閤、明智光秀、多田滿仲、親鸞上人、契沖阿闍梨、德川秀忠、德川頼宣、淺野長矩など有名な人々の墓から諸藩諸侯の廟墓、芭蕉碑、朝鮮役士卒の碑、その外士農工商貴賤を問はず林立してゐる。何れも遺髮、遺骨の一部等をこゝに埋めたものだといふが隨分如何はしいものもないではない。何れにしてもよくもこれまで猫も杓子も墓をこさへたものだと思はれるが、これは弘法大師が、『我が山に送る亡者の遺骨は、われ三密の加持力をもつて兜率の淨土に往生せしめ、當來は慈導說法聽衆の菩薩たるべし』と吹きたてたのによるのだ。

一の橋からかうした道を二十丁辿ると【奥の院】に出る。奥の院の手前に全國六玉川の一である『高野の玉川』の美しい流れがある。南岸に大師の歌碑があつて

『忘れても汲みやしつらむ旅人の、高野の奥の玉川のみづ』と鐫つてある。この川にかゝつてあるのが【御廟の橋】といふので、長さ四間四尺幅五尺五寸三十七枚の橋板に金剛界三十七尊の稱名を書したものである。橋を渡ると、靈元、中御門、櫻町桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁明、孝明の諸帝の御寶塔が並んである。そこを過ぎると【燈籠堂】がある。この堂は卽ち奥の院廟前の拜殿になつてゐるのである。開山第二世の眞然僧正が大師の遺旨を体してこれをたてたものだが、祈親上人が誓願をたてゝこゝに石火をきつて常燈を掲げた、それ以來その火はつがれ〳〵て一千有餘年の間消ゆることなく傳へてゐるのだといふ。その東西に幾多の燈が掲げられてある。謂ゆる長者の萬燈貧者の一燈が卽ちこれなのである。燈籠堂の奥は卽ち弘法大師の廟で周圍を玉垣でめぐらし、石壇の上は三間四面の寶形造の堂がたつてゐる。左の壇の下に經藏がある。經は石田三成がその母のために納めたものであるといふ

右の壇の下は骨堂になつてゐて、何人でも納めることを許してある。

以上で山内の見るべき所は大略を盡した。これから高野全体のことに就て少しく述べる。前にあげた弘法大師の上表文で見ても知られる如く、あの見聞の廣い空海が、『少年の日好みて山水を渉覽』した中で『尤も修禪によろしき』深山の平地として特にこの高野を選定してゐる所を見ると餘程氣に入つてゐたものらしい。その後早くも千有餘年の歳月が流れたが、駸々乎たる文明の進歩は獨りこの山のみを除外するわけにはゆかなかつたであらう。況んやついその麓まで瀛車が通じ電車が開けてゐる今日である。既に寺の方でも僧侶の徒弟に新しい時代に適應した教育を施すためにこの地に高野山大學までたてゝゐる。さうした今日の高野は、弘法大師が『荒藪を芟り夷げ』た時代とは雲泥の差があることは勿論である。同時に他の方面では大に現代的な、ある意味に於ては昔とは似ても似つかぬ俗世界になつてしまつ

てゐるのであるが、然し實際に今日この地をふんで、何千年を經たかと思はれるやうな大きな杉檜槇の樹なぎ、蓊鬱として茂るがまゝに任せてある暗い山や、日當りの悪いじめ〳〵した苔の道、千仞の谷の片側に危かしく架けられた棧道などのたゝずまひを見る者は、如何にしてもそこが、今に何百萬といふ信徒を擁してゐて、月々の登山者だけでも萬をもつて數へる程の盛んに開けた山であることは思ふことが出來ないであらう。著者か嘗て遊んだ時、黑い麻の衣を着た高野山大學の學生が四五人、ラケットを下げて歩いて來るのに會つた。著者は思はず吹き出した。この山にラケットがあまりに馬鹿々々しい不調和を感ぜしめられたのだ。今日でも猶ほかくの如しとすれば弘法大師が、『吉野より南行一日、更に西に向つて去ること兩日程、平原幽地あり名けて高野といふ。紀伊國伊都郡の西に當り四面高嶺人蹤蹟を絶てり』と上表した時代はどんなであつたらうと思はれる。『但恨むらくは高山深嶺は

禪客に乏しく。幽藪窮巖は定賓の入ること稀なり』と歎いた空海が『尤も修禪によろし』として選定した當時のこの山の幽閑閒寂は今日にあつては到底想像の外のものであつたであらうと思はれる。

鐘の音はあけぬときけど高野山、なをはるかなる曉のそら。　新千載

この山では佛法僧といふ鳥がなくのが名物であると昔から言はれてゐる。ある書に曰く、

『佛法僧鳥はこの山の名物なり。その雄は鳩に似て瘠せ、尾の端黑く、嘴細く脚ともに赤色なり。鳴く聲ブッボウ〳〵と三聲し、あとソウとひく』云々。

高野にまゐりて

ほろ〳〵となく山鳥やきりの玉　蕪村

寺は度々變革があつた。殊に後世戰國の時代になつて來ると、恰も比叡山延曆寺が

僧兵を蓄へたと同じやうに圓頂黑衣の徒が弓矢をたばさんで横行したものである。殊に高野では、如何なる罪人でも一旦山へ逃れ來たものは之を保護して出家をさせるといふ舊慣があつたので、戰國時代のやうな變革常なき時代には、諸國諸家の食ひつめもの浪人など皆この山へ逃げこんだものだ、從つて非常な勢力を蓄へてゐたものだが、何分土地が邊僻で、あまり世間との交渉がなかつた。然るに天正九年、織田信長に叛いて誅せられた荒木村重の餘類相率ひて高野山にのがれたので信長使を遣はしてその引渡を迫ると、高野山では使を斬つて命に應じなかつた。仍ち信長大に怒つて高野征伐の兵を出し、叡山同樣一山を焦土にせんとしたが朝廷から勅使がたつて信長を諭されたのでやむを得ず兵をかへした。然し信長は機會さへあらば之を殲滅しやうとねらつてゐた。次いで豐臣秀吉も高野の勢力を忌んで征伐を企てたが、時に高野の客僧興山(木食上人)單身秀吉の許に赴いて宥免を乞ふた。秀吉は

興山の膽力と識見に感じて、今後は武具兵器をすて、佛事勤行學問に專念すべしといふ條件で之を許した。かくの如くして高野はその命脈を支持することが出來たのみならず、かの木食上人は爾來秀吉の非常な信任を博し、母公のために靑巖寺卽ち今の金剛峰寺を建て文祿三年には秀吉みづから高野に詣で一山の大衆を會して大法會を營んだ。かくして法燈いよ〳〵赫灼としてその盛を誇つたが、天保年間火を失して一山殆ど烏有に歸したのは惜みてもなほ餘りあることである。この時寺寶の燒失したものも少くはなかつたが、御影堂の背後の寶庫に納められてあつたものは燒けないで殘つた。さすがに古い寺だけに現存してゐるものは何れも稀世の珍品逸物で、國寶となつてゐるものが少くない。先にのべた大師飛行の三鈷杵の外、螺鈿蒔繪小櫃など國寶に列せられ、その外大師入唐して將來した佛具、道具類、綸旨院宣、敎書、諸名家高僧の筆蹟、古文書など史家美術家の尊重措かざるものが數多

ある。また繪畫では弘法大師監造の五大明王畫像、眞流上人筆大師影像、鳥羽僧正筆大威德明王像など皆有名なもので、そこらの破れ寺に轉がつてゐる弘法大師作だの行基自作だのと稱するものとは大分わけがちがう。その他彫刻で國寶になつてゐるものは、親王院の智證大師作不動明王木像、成蓮院の地藏菩薩木像、不動院の八大童子像、淨心院の運慶作彌陀像等で近年また繪畫で龍王院の弘法大師筆狩場明神像、櫻池院の藥師十二神像、無量壽院の文殊像、明王院の智證大師筆不動明王像等何れも國寶に編入せられた。

長い年月の間にはまだ〳〵貴重な寶物が、隨分散逸もしてしまつたであらう。殊に維新後廢佛の論がやかましくなつた時、隨分寶物が持ち出されて二束三文に賣り飛ばされたことがあつた。高野山のものといへば頭からい、ものと相場がきまつてゐたので、骨董屋などは盛に出かけてお寺をだましこんだものだ。何しろ高野山から

拂ひ下げたといふ證據さへあれば、折紙なしで人が信用したといふ人氣で、隨分ボロイ儲けをやつた。ひごひ奴になると何處からかエタイの知れぬ古びたものを探し出して來てはお寺へ口錢献上で高野山什物にしてもらつて素人をだましたゝのだ。所で上には上があるもので、そいつを見こんだ圓い頭の御連中が、今度は御自身で里から古めいたものをもち込んでは、これは當山の什物でなゞゝ、むづかしい顏をして骨董屋をだます方へ宗旨がへをやつた豪傑が隨分あつた。

そろ〳〵惡口になつて來たから、足もとの明るい內に下山としやう。下山道は鐵道や電車の便から言へばぜひともこの道を戻らねばならぬ。神谷へ戻つてから、もとの橋本へ引かへすなり、又は高野口の方へ出るなり二の道があるから便宜の道を隨意に選ぶべきである。高野口の方へ下りると紀の川の南岸、九度山村に【慈尊院】があるから、橋本から登つたものは歸り路高野口の方へ下りて見てゆくのも一興があらう。本稿は橋本からの登山道を說いたから、下山道の方は高野口の道を說かう。神谷から道を左に取つて二十丁餘り下りると【椎出】に出る。こゝから道は丹生川の溪流に沿ふてゐるが、溪流の風光は頗る面白い。麓に近くと【眞田ヶ淵】といふのがある。この山の麓は眞田幸村が大阪城へ入るまでに閑居して居た所で、淵は卽ち幸村が水馬の練習をやつた所だといふ。こゝから九度山村へ下り更に丹生川を渡つて西へゆくと【慈尊院】がある。この寺は弘法大師が高野山を開いた時に、その母のために彌勒の像を作つてこの寺を建てゝ慈氏寺と名けた。承和元年その母大師を慕つてこの地へ來たが、高野は結界の地であるから母と雖も女人の入山せしめることは出來ないといふので、この寺に入れて孝養を盡した。翌二年二月母は八十三歳を以てこの寺に死んだので、その舍利を彌勒像とともに靈窟に安置し慈尊院と稱したといふ。よつてこの寺を一に【女人高野】ともいふ。またこの寺は一面に

於て高野山の麓にあつて、俗世間と交渉のある出納經濟のことを司る役目をもつてゐたので、山上の本院に對してこれを下院といひ、中古高野に行幸啓等のあつた時はいつもこゝがその御假泊所になつた。この寺の附近に【善名院】がある。眞田幸村が閑居してゐた邸宅の趾を後に寺にしたもので、今にこの寺のことを【眞田屋敷】といひ、本尊の地藏尊を眞田地藏とよばれてゐる。境内に幸村父の【眞田昌幸の墓】がある。昌幸は人も知る如く信州上田の城主で關ヶ原の合戰に大阪方に與して、上田の城に立て籠つて德川秀忠の軍をくひとめた。ために秀忠は遂に關ヶ原に出ることが出來なかつた。然し戰ひは遂に德川の勝利に歸しさすがの昌幸も一子幸村をはじめ一族郎黨を率ひて流浪し、遂にこの地に來つて蟄伏し、紐をあんで生計をたてねばならなかつた程落魄したものだ。この内職に編そめた紐は卽ち眞田紐の名で今に遺つてゐる。慶長十六年昌幸は遂にこの地で死んだ。その後幸村は大阪城

に迎へられ智勇の名を天下に轟かせたことは人のよく知る所である。慈尊院から北へ眞つ直に紀の川を渡ると關西和歌山線の妙寺驛に出るのであるが、普通はこゝから九度山村の方へ戻つて高野口驛へ出ることになつてゐる。

關西和歌山線

＝和歌山市驛より王寺驛まで五十四哩三分＝

和歌山市驛

【和歌山市】 五大都市和歌山市の部參照。

田井の瀨驛

驛の南方宮村秋月に【日前國懸宮】がある。宮より更に南二里和佐村大字和田に【竈山神社】がある。何れも和歌山市、和歌浦の條に詳しく述べたから參照すべし。

布施屋驛

【伊太祈曾神社】 驛の南二里、海草郡西山東村にある。五十猛命、大屋津姫命、抓津姫命の三座を祀つた官幣中社で、延喜式に見ゑた古社である五十猛命といふのは素盞男尊の御子で、他の二女神はその妹姫である。この三神は夙に紀伊に入つて植樹のことに從はれたことが日本書紀に出てゐる。この宮の

神域は常盤山一圓一萬四千餘坪で、四圍は杉だの檜だのが鬱生して極めて幽邃である。社殿もまた甚だ壯麗で、往昔は紀伊國の一の宮と稱して、朝廷歷代の尊崇甚だ篤かつた。例祭は十月十五日、その外四月十一日の春祭、七月十日の夏祭など非常に盛大な祭りで、遠近の參拜者が群集する。

岩出驛

【岩出大宮】 驛より約四丁、岩出村字宮にある。熱田神宮と三所權現を祀つた社で、境内に後鳥羽上皇の御遺髮を埋めたといふ【王塚】がある。

【根來寺】 驛より北方一里、根來村西阪本の根來山にある。寺は大治五年興教大師の創建で、眞言宗新義派の總本山になつてゐる。本尊は弘法大師作といふ四尺二寸の不動明王で、世にこれを身代錐鑽不動といつて名高い。その緣起を略述すると、開祖の興教大師(名を覺鑁といふ)は後鳥羽上皇の叡信淺からざりし聖僧で、東寺の西院に安置してあつた弘法大師作の不動明王像を賜はつてこの根來寺を創建せしめ

また高野山金剛峰寺の座主を兼しめ給ふた。後覺夐は高野の座主たるこゝを辭し、根來に來つて不動明王を安置してある堂の中へ入つたきりで只管定座して出でなかつた。ある人が外からそつと窺つて見ると、覺鏤不動明王となつて伽樓羅焰の中に座してゐるのを見たといふので忽ち大評判になつた。金剛峰寺の僧がこれを聞いてさては覺鏤既に入滅したのを徒弟ごもが屍をこゞめていゝかげんな事を言ひふらすのであらう、化の皮を剝いでやらねばならぬといふので、ある日大勢で根來寺へ押かけ、覺鏤の座してゐる堂の中へ入つて見ると、上人の姿は見ゑず、唯二体の不動が光焰赫々として並び座してゐるだけであつた。押しよせた僧徒達は氣味が惡くなつて一体の不動明王の膝へ鏃をつきたてると鮮血が走つた。すると覺鏤がしづ〳〵とたちいで、汝等高祖大師眞刻の本尊を毀けて何たる狼籍をするぞといつた。卽ち僧徒等が鏃をつきたてたのは本尊の不動尊で、隣に並んでゐた不動明王と見たのが覺鏤

であつたので、僧徒は何れも怖れをなして逃げてかへつた。卽ちそれからこの本尊が身代錐鑽不動といつて世に名高くなつたといふ。此寺は往古は二千七百餘の堂宇坊舍のある盛大な山で、高野山とその隆盛を競つたといはれてゐるが、戰國時代に例によつて僧兵を擁して盛んに威を振つた。天正二年有名な本願寺一揆の時には、本願寺の味方をし、紀州有田郡岩屋城主畠山貞政と聯合して、盛んに附近の在所を掠奪し、泉南郡貝塚、日根郡中野、千石堀などに壘を築いて猖獗を極めた。天正五年織田信長十五萬の兵を率ひてこれ等の征伐に向つたが、堀秀政、不破河内守等根來寺を圍み、附近の在所に放火して寺を孤立せしめたので、さすがの僧兵も降を乞ひ、爾後本願寺を助けぬといふ約束で免された。然るにその後相變らず本願寺を助けて武威を張つたので、天正十三年、豐臣秀吉十萬の兵を率ひて根來を攻め之を陷れた、この時僧房から火を失して一山の堂宇殆ど悉く燒失した。この時やけ

のこつたものは本尊の不動明王と今の寺内にある高さ十八間の大塔と大傳法堂とその他大傳法院の一部だけであつた。その後紀州の領主となつた淺野幸長、德川頼宣が再興に力をつくした結果、今の不動堂、大師堂、求聞持堂、毘沙門堂、觀喜天堂、文珠堂、護摩堂、光明堂、開山密嚴堂など次第に再建せられたのである。現今はまたそれらのものも大に衰頽に傾いてゐるが、總寺域六萬餘坪、亭々蓊々たる古杉老柏に圍まれた域内に數千株の櫻が春になると白雲の如く滿山を罩めるので非常に名高いその壯觀は遙に嵐山以上で、雅趣に於ては吉野山と並稱せられる程の櫻の名所になつてゐる。この寺の寶物には、覺鑁のかいた經文、佛像、弘法大師眞筆と稱する經文その他嵯峨天皇、鳥羽天皇、美福門院御筆といふ經文冷泉爲村筆の六歌仙の色紙、若冲の畫屏風等名がある。就中、三條宗三が自ら鑄て寄進したといふ釜は、根來山型といつて工藝家が非常に推稱してゐる逸品である。

【福琳寺】 根來寺の東、池田村豐田にある新義派眞言宗の寺で、古くは慈氏寺と云つて光仁帝の寶龜二年頃に既に存してゐた古刹であるといふ。寛仁二年再建せられ平忠常謀叛の時には兇徒調伏の勅願寺になつたさうだ。池田村の北に延喜式内の古社【海神社】根來村字森にはこれも延喜式の古社【荒田神社】がある。

打田驛

【田中の井戸趾】 驛の所在地田中村にあるむかしこの邊に灌漑の便に水を湛へた池があつた『田中の堰所』と云つて紀伊國の歌名所であつたといはれてゐる。

白露のおくてのおしれうちなびき、田中のゐどに秋風ぞふく　入道前太政大臣

蛙なく田中のゐどに日はくれて澤潟なびく風わたるなり　寂蓮法師

粉河驛

【粉河町】 紀の川の北岸にあつて、大和街道の要衝に當つてゐる町で那賀郡第一の主要地である。酢、蒟蒻の產が有名で、殊に酢は粉河酢といつて甚だ

名高いものだ、西國三番の靈場で名高い【粉河寺】は町の北端にある。またこの地は古來鑄金の名工が出た地として名高いもので、奈良東大寺の大佛を鑄た源朝勝及びその子孫等代々の名工は皆この地の人であるといふ。

【粉河寺】　驛より五丁、風猛山の麓にある。寺號を【補陀洛山施音寺】といふ、宗旨は天臺宗である。むかし光仁天皇の御宇、風猛山の麓に大伴孔子古といふ武士があつた。常に山に入つて射獵を事としてゐたが、ある夜山中の池の畔で、赫奕たる光明を放つてゐる所があるのをみとめた。孔子古すなはち一念發起して、そこに寺を建てやうと思ひ先づ一軒の柴の庵を結んだ。するとある日一人の美しい童子が孔子古の所へやつて來て、孔子古のために佛像を作つてやるからといふので、童子は七日間その庵に籠ることになつた。籠つてゐる間は誰も外からのぞいてはならぬといふ事であつたので、孔子古は庵をさけてゐたが、約束の八日目に庵へ行つて見る

と童子の姿は見えずして、金色の千手觀音の像がそこにたつてゐた。孔子古大に感喜し、やがて河内の馬馳市の長者佐太夫、紀伊國伊都郡の澁田の大刀自といふ有力な後援者を得て營んだのが今の粉河寺の始めであるといふのがこの寺の緣起だ。即ちその千手觀音が本尊で、脇立は風神雷神、二十八部衆等三十体ある。昔から非常な信仰を得て僧坊も五百六十に餘る巨刹となり、勅願寺にもなつてゐたのだが、根來の亂の時に豐臣秀吉のために燒かれてしまつた。慶長以後漸次に再興されたのが今の寺院で、本堂、千手堂、六角堂、行者堂、地藏堂、中島堂、羅漢堂等二十二宇八院ある。就中、中島堂といふのは中門から半町ばかり行つた所の出現池といふ池の中島にたつてある堂で、緣起にいふ所の孔子古が赫奕たる光明をみとめたといふ池はこの池で、あらはれ出た童子は觀世音の生身であるといふので、この堂をたて、童男大士を本尊にしてゐる。こゝが即ち當山の本坊になつてゐるので、坊の名を御

池の坊といふ。こゝに左甚五郎作といふ虎の彫物があるのが粉河寺の名物の一になつてゐる。また寺の北方には【十禪律院】がある。俗に粉河寺の奥の院と稱せられてゐる堂で、本堂は方四間、總欅作りの立派な建築である。文政十二年に紀州候の建立したものである。その外當山の寶物には、後醍醐天皇輪旨、護良親王令旨、鳥羽僧正筆の當山の繪緣起、兆殿司筆十六羅漢、巨勢金岡筆五大尊像などいふものが名高い。境内は一萬五千餘坪、附近は老樹鬱蒼たる中に櫻、楓等多く、粉川の清流に臨んで、金殿樓閣の聳ゆてゐる景趣は全く繪のやうである。寺の會式は一月、三月六月、八月、十一月の各十八日に盛大に執行されるが、中にも六月十八日の祭禮は、世に粉河祭と稱して近畿の一名物になつてゐるので非常な雜沓をつげる。

『三位中將平維盛はこの次に粉河寺にまゐられける。ミミミミさる治承の頃小松殿熊野參詣の次にかの寺にまゐり給ひたりけるに、書きおきたまへる打札あり、今

一度父の手跡を見たまはんと思ひ出で給ひけり。かの札御覽ずれば落涙に墨きにてまた字の貌は見ゆねども、重盛といふ字ばかりは彫て墨を入れたれば、ありしながらに變らねばなく〳〵これをぞ見給ひける』――源平盛衰記

【觀音寺】 驛の西約十丁、長田村別所にある。本尊は如意輪觀音で、俗に長田の厄除觀音といつて、毎年二月の初午二の午には近鄕近在を始め和歌山方面からも多くの參詣者が出るので名高い。なほ、この附近長田村字北志野及び南志野の地は【神功皇后小竹行宮趾】であると傳へてゐる。日本書記に皇后が紀伊の國に入り給ひ、忍熊王を攻めんがために小竹に行宮をうつし給ふた事が見ゆてゐる。

【富士崎】 粉河町の東南約十二三丁、紀の川の北岸に、河中に突出した奇巖重疊たる所で、辨財天の社がある。附近の河の中に富士山のやうな巖が突起してゐるので富士崎の名が起つたが、島を挾んで流れる清流に、點々たる白帆が風を孕んで上下

する河の景色は實に絶佳である。こゝの對岸、卽ち紀の川の南岸に【龍門山】がある。二千五百尺の高山で、俗に【紀州富士】の名がある。延文四年南朝の驍將塩谷伊勢守が畠山義深の軍と戰つて討死した所である。その墓といふのが山の西麓安樂川村にある。俗に塩塚と稱してゐる。登山は北麓の勝神村から三十丁で絶頂に達する。絶頂には塵無池・仙人石などいふものがある。展望が頗る壯大である。

名手驛

【名手神社】 驛の東方、名手村字穴伏にある。俗に六社明神といひ、境内に狩場明神の影向石といふのがある。この名手村といふのは、昔は高野登山の表門道になつてゐて、重要な地になつてゐたが、今は交通の便宜上高野口や橋本から女人堂へ出る裏門道の方が盛んになつて、表門道はすつかり寂れてしまつた。(高野電鐵橋本驛高野山の條參照)

【妹脊山】 驛から東二十丁、紀の川を挾んで兩岸に妹脊山がある。北岸にあるのを

脊山(兄山とも書く)南岸にあるのを妹山と呼んでゐる。古天皇明和浦や牟婁津なごへ行幸のあつた時は常にこの附近を過ぎらせ給ふたといふが、當時この妹山は供奉の歌人たちの感興をひごくそゝつたものであつたらしい。後世まで歌名所として名高いことは人のよく知る所であらう。尤も紀の川の上流大和吉野郡上市村の上で、卽ち吉野川を挾んで同じ名の妹背山といふ所がある。一說には大和の方が眞の妹脊山であると斷ずるものもある。折衷說になると大和の方は單に妹山で、紀州の方はこれまた單に兄山なので、大和の妹山と紀州の兄山をあはせて妹脊山だといふ說がある。これは大和と紀州の兩方の顏をたてた中裁說でなるほどこれでは喧嘩にならない。兎に角我國最古の歌集なる萬葉集には「麻ごろも着ればなつかし木の國(紀の國)の妹脊の山に麻まく吾妹」といふ歌があるから、紀州の妹脊山の方が大和のよりも古いことは證據だてられる。降つて古今集になると「流れては妹脊の

山の中に落る吉野の川のよしや世の中」こいふ歌があるから、この時代にもはや大和の妹脊山の方が有力になつてゐたやうであるが、吉野川こいつても紀の川こ云つても畢竟同じ川で、上流こ下流こで名が變つてゐるだけなのだから吉野川こいつたからこて必ずしも大和こいふ證據にもならない、たこへば大阪の市で堂島川だの土佐堀川だの名がわかれてゐて、やはりそれば總括的には淀川で通用してゐるやうなものだ。歌によつては吉野川こも紀の川こも言はずに妹脊川なぎゝ言つてゐるのもあるのだから、こんな文句の末節をつかまへて眞面目な議論をするこ結局雲をつかむやうになるばかりだ。それは兎に角この妹脊山附近頗る勝景の地で、川の中には船岡山こいふ小さな島があつて松、楓なご繁茂し、兩岸の景色に一層の景趣を添へてゐる。

吾妹子に吾が戀ひゆけば遠しくも、並びゐるかも妹と背の山　萬葉集

妙寺驛

【慈尊院】紀の川を隔てゝ、對岸にある。詳しくは高野電鐵高野山の條參照、往昔はこの地も高野登山道の一要驛であつたのだが今はその用を失つてゐる

高野口驛

高野登山口こして現今重要な地になつてゐる。こゝから高野山まで三里十八丁、橋本から上るよりも一里近い。道順は椎出村は經て山腹の神谷に達し、そこで橋本からの登山道こ合して女人堂へ登るもので詳しくは高野電鐵橋本驛高野山の條參照。

橋本驛

高野電鐵橋本の條參照。

隅田驛

【隅田八幡宮】驛の西方隅田村字垂井にある。神功皇后三韓より凱旋の折の駐蹕地こ傳へてゐる。寶物に皇后が三韓から持ち歸りたまふたこいふ古鏡を藏してゐる。古來隅田の庄の總鎭守になつてゐた社で、境内二千四百餘坪、壯麗な社殿をもつてゐる。

【眞土山】 驛の東北方、紀州伊都郡と大和宇智郡との境にある山である。待乳山とも書く、その山麓を流れてゐる待乳川(又の名堺川)の下流、紀の川の合流點に突出してゐる所を【庵崎】といつての古の歌名所である。萬葉集に、「まつち山ゆふ越ゐゆけば庵崎の、すみ田川原に獨りかもねん」といふ歌がある。この隅田川といふのは卽ち紀の川のことで隅田の庄では紀の川の別稱を隅田川といつてゐる。東京の隅田川の附近にも待乳山と名づけられた所があるが、あれは卽ち江戸の開けた當時にこゝの隅田川と待乳山の歌名所に因んでつけた雅名である。

誰なかも待乳の山の女郎花、秋さちぎれる人ぞあるらし　新古今集

大和二見驛

【城山遊園】 驛の附近にある二見城の舊趾である。城は慶長年中松倉重政の築いたもので、今は遊園地で萩の名所になつてゐる。秋は非常に美しい。又この附近の紀の川は鮎狩の名所で、二見驛には鮎狩案內所の設備がある。(高野電鐵橋本驛紀の川の條參照)

五條驛

【五條町】 大和宇智郡の中央に位する郡中第一の町で、郡役所の所在地である。文久三年天誅組の徒黨がこゝに集まつて十津川方面から來る幕府の兵と戰つたことは史上で名高い事實である。產物は晒布と紀の川の鮎で、殊に鮎狩は遊船の設備がある。(高野電鐵橋本驛紀の川の條參照)

【賀名生皇居趾】 賀名生村字和田にある。後醍醐天皇の宮趾で、當時の建物は今にその儘にのこつてある。うち見た所普通の農家に少し手を入れたに過ぎないやうないぶせき建物で、萬乘の御身をもつて、かゝる山家に漂泊たまふた天皇の御心情は拜察するだに涙こぼる、心地がする。こゝにはまた後村上天皇御遺愛の南天といふのがある。皇居趾の南方、黑淵に後村上天皇の宮趾【黑木御所趾】がある。

【榮山寺】 宇智村字小島にある。一に梅寶院と稱してゐる。養老三年藤原武智麿の

建立した所で、境内の八角堂は武智麿の子豐成の建立したものがその儘のこつてゐるのである。寺の後にある古墳を武智麿の墓と傳へてゐる。この寺に古い鐘がある銘によると、もと山城深草の道澄寺の鐘であつたのだがごうかした都合でこの寺に傳はつたものだ。銘文は小野道風の書といふので珍重せられてゐる。今國寶になつてゐる。この寺は吉野川に臨んだ極めて勝景の地で、寺の附近三四丁の間は吉野川を音無川と稱せられてゐる。奇巖兀突とした河中に紺碧の水が音もなく淀んでゐる所で、頗る勝景である殊にこの附近は鮎釣に最もいゝ所だ。

北宇智驛

【阿太桃園】 驛の東十丁阿太村にある。十餘丁に渉つて一面の桃園で花時は壯觀を極める。

【高鴨神社】 驛の北方二十五丁葛城村字鴨神にある、河遲鋤高日子根神を祀た社で人皇五代孝昭天皇の御宇に社殿をつくつて奉祀したと傳へられてゐる古社である。

【金剛山】 驛の西北に聳ゑてゐる高峰が金剛山である。北宇智から小和村水野村を經て登山道がある。山のことは河南線富田林驛の條に詳しくのべたから參照すべきである。

吉野口驛

この驛から吉野に至る吉野輕便鐵道が通じてゐる。（別項吉野鐵道の條參照）驛の傍に【葛温泉】がある。炭酸泉で近年發見されたものだが遊ぶものが多い。

壺阪驛

【高取町】 驛の東約一里にある。植村氏四萬石の城下で古く奈良朝以前にこゝに國府を置かれた。今に【國府神社】がある。

【高取山城趾】 高取町から更に五十丁東、高取山の中腹にある。頗る嶮しい道である。南北朝時代には南朝が據つた要害堅固の地で、德川時代に入つて本多正慶の有に歸し、更に寛永十八年以來植村氏が之を守つた。

【壺阪寺】 高取町の西方、清水越ゐを十餘丁上つた所にある。本名を南法華寺といひ、西國六番の札所である。本堂は八角形で千手觀音の像を安置してある。淨瑠璃の『壺阪靈驗記』で名高い觀音樣だ。寺は大寶年間の創建で古くは法相宗を奉じてゐたが中世から眞言に改めた。建物は。二度ばかり燒たが、現存の二王門は永久三年の再建で卽ち今から七百年前のものである。その他三層塔、禮堂、阿彌陀堂等があるが、中にも禮堂はこの寺の建築中最古のものである。

御所驛

【御所町】 南葛城郡の中央に位する町で、下市街道と上市街道との會合點としてその交通の要衝に當つてゐる。木綿絣、縞織等の產がある。

【葛城山】 御所の西方に聳ゐてゐるのがそれである詳しくは河南線富田林の條參照

【櫛羅瀧】 驛より西三十丁、葛城山の東麓櫛羅村にある。高さ六丈餘、附近の景趣頗る幽邃である。櫛羅村から南約十五丁、吐土鄕村字森脇に葛城の神一言主神を祀

た【一言主神社】がある。この境內もまた甚だ幽邃で風景がいゝ。

【茅原寺】 驛の東約十丁、掖上村大字茅原にある。吉祥草院といふのが本名で、役小角の誕生地だといふ。小角の像を安置してある。この附近に【孝昭天皇陵】【孝安天皇陵】がある。

【嗛間丘】 掖上村大字柏原にある。神武天皇がこの岡から國中を覽はして山川の狀を「蜻蛉の臀咕の如し」と仰せられた。これによつて我國の事を秋津島といふに至つたといふことが日本書記に出てゐる。今にこの附近に秋津村といふ村がある。

大和新在驛

【角刺宮趾】 驛の南忍海村柳原にある。日本書記に、古、顯宗天皇と仁賢天皇互に位を讓り給ひて久しく決しなかつたので、兩帝の姉宮飯豐靑皇女が忍海角刺の宮で臨時に政をとらせ給ふたことが見ゐてゐる。今その宮趾に【角刺神社】がある。また【飯豐靑皇女御陵】が近傍の新床村北花內にある。

高田驛

【高田町】 北葛城郡第一の町である。奈良櫻井線と和歌山線との會合點でその交通の要衝に當つてゐる。木綿、米等の有力な集散場である。

【双子山】 高田町の西約一里半、大和と河内の國境に聳ゆてゐる山で、詳しくは河南線貴志驛の條參照。

【當麻寺】 双子山の東南麓當麻村にある。この地はもと役小角修法の地であつたが天武天皇の白鳳年間、河内山田郷にあつた禪林寺をこゝに移し建てたのがこの寺である。本堂、金堂、講堂、東塔、西塔、曼荼羅堂その他の僧房甚だ壯嚴を極めた大刹である。殊に東西兩塔は建築當初のものが現存してあるので學者の間にも有名なものになつてゐる。ともに特別保護建築物になのてゐる。また曼荼羅堂にある淨土曼荼羅は天平年間の製作で、俗に中將姫藕糸の曼荼羅と稱せられてゐるものである。今國寶になつてゐる。金堂は正中二年、講堂は乾元二年の再建に係るものであるが、

何れも立派な建築である。その他この寺の寶物に土佐吉光筆の法然上人行狀繪卷が名高い。

下田驛

驛の附近志津美村今泉に【武烈天皇陵】がある。また下田村北今市には【顯宗天皇陵】がある。

王寺驛

關西本線同驛の條參照。

吉野鐵道

‖吉野口驛より吉野驛まで七哩二分‖

吉野輕鐵〔營業時間〕吉野口より吉野まで、午前七時二十七分より午後八時十三分まで八回發車、吉野より吉野口まで午前五時四十五分より午後六時三分まで八回發車〔賃金〕吉野口吉野間二十三錢關西本線。及び同和歌山線何れも連絡切符を發賣す。花時は臨時列車の増發あり。

吉野口驛　關西和歌山線同驛の條參照。

下市驛　【下市町】　驛より南五丁、吉野川の南岸にある。この町は吉野塗の名産地で、吉野郡第一の町になつてゐる。尙ほこの町の名物で釣瓶鮨といふのは義經千本櫻の淨瑠璃で世に知られてゐるが、この町に淨瑠璃に出てくる鮓屋彌助の家といふのが今にある。淨瑠璃を歷史と心得てゐるのだから世話はない。下市町から吉野川對岸の下淵との間へ大きな橋がかゝつてある。この橋は南音市南、葛城、磯城等の隣郡との交通の要衝になつてゐるので、これ等諸方面から日々その橋を渡つて輸送される米穀の夥しいところから【千石橋】と名づけられてゐる。

吉野驛　【六田の淀】　驛前から吉野川の對岸六田に出る間、今は橋がかゝつてあるが、昔は渡場で、六田の渡といつて上市の櫻の渡、瀨上の梅の渡と共に吉野川の三渡の一として名高かつた。一に柳の渡ともいひ、大峰山の中興理源大師の開く所である。こゝから五町ばかり行くと黑門がたつてある、そこから奥が櫻に名高い【吉野山】である。（別項參照）

【上市町】　六田の上流、吉野山の北岸にある町で、材木の寄湊地として名高い。こゝに前に述べた吉野川の櫻の渡がある。この附近は所謂【吉野川の鮎狩】の名所

であつて、町には鮎狩り案内所を設けてある。この川の鮎は世に櫻鮎と云つて香味の美なる點に於て近畿第一の稱がある。ウチ網といふこの川筋獨特の方法で鮎をとるので、上市に遊船の設けがあるから案内所へ頼めば出してくれる。またこの上市の上流に歌名所で名高い【妹背山】がある。紀の川にも同じ名の妹背山があるが、この事は前に和歌山線名手驛の條に詳しく述べて置いたから略す。尚ほ、妹背山から更に一里程上に遡ると【宮瀧】がある。この附近は川の風景非常に美しい所で柴橋といふ橋がかゝつてある。この橋の附近は鮎の極めて多い所であるが漁禁區になつてゐるのでとることが出來ない。鮎狩りはこの少し下流から許されてゐる。また、【大臺ヶ原】登山はこゝから奥へ登つてゆくのであるが、別項附錄に項を改めて記すことにした。

【吉野山】　その櫻の名高いことは今更書き立てるまでもなく天下周知のことである

また後醍醐天皇蒙塵の地として歴史上名高い所であることも説明を要しないであらう。その外古くは神武天皇も行幸になつた。應神天皇はこの地に離宮を營みたまふたことがある。左に大略の案内を記さう。

六田から五丁程ゆくと黒門があつて、それが吉野山の入口になつてゐることは前にも記した黒門をすぎて五つ曲りの阪を過ぎると漸次櫻が多くなつてくる。これを【長峰の櫻】といふ。二十八丁目に【村上義光忠烈の碑】がある。義光が大塔の宮の身代りにこゝで討死した事は史

吉野山中の千本櫻

上でも有名な話になつてゐるが、その墓は碑の上方にある。こゝから一二丁登つた附近は山も谷も櫻でもつて埋められてゐる所だ。俗に【口の一目千本】と稱せられてゐる所である。この香雲の中に埋もれて【吉野宮】の甍が見ゐる。宮は後醍醐天皇を祀つた官幣大社で、明治二十五年の創建に係る。その攝社に藤原資朝、藤原俊基を祀つた【御影社】兒島高德、松山茲俊を祀た【船岡社】土居道增、得能通言を祀た【瀧櫻社】の三社がある。これから先に【吉野町】が道の兩側に崖に沿ふて長々と連つてゐる。町を通りぬけると【一の橋】がある。欄干に「豐臣秀頼再修」と彫つてある。それから【隱れ松】【關屋の櫻】等を横に見てそこにたつてある黑門をくゞると【金峰山寺】である。黑門の次に銅の鳥居があつて金峰山寺の總門なる五丈二尺の仁王門がたつてある。石段を上ると【藏王堂】の莊嚴な建物を見るであらう。この堂は卽ち金峰山寺の本堂で、役小角の開基、南北朝の戰ひの時兵火に罹つ

て康正元年再築され、更に慶長十九年豐臣秀吉が大修覆を加へたものが今の建物で十八間四面の立派なものだ。本尊は二丈餘の藏王權現の木像である。堂の右に【威德天神社】がある。天慶年中僧日藏の創建する所といひ、昔は立派な社殿をもつてゐたのだが兵火に罹つて、今は小さな堂があるばかりである。藏王堂の前にある四本櫻といふのは、大塔宮吉野落の時に最後の宴を張られた遺蹟として名高い。

『敵引けば大塔宮は藏王堂の大庭に並居させ給ひて大幕うちあげて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つこころの矢七筋、御頰さき二の御腕二個所つかれさせ給ひて血の流るゝこと瀧の如し。然れども立ちたる矢をも拔かせず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ながら大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相摸、四尺三寸の太刀の尖に、敵の首をさし貫きて宮の前にかしこまり、戈鋋劍戟を降らする電光の如くなり、盤石岩を飛ばすこと春の雨に相同じ、然りこはいへども天帝の身に

は近づかで、修羅かれがために破らるゝ、はやしを揚て舞ひたりける』――太平記

藏王堂の西三丁に【實城寺跡】がある。もゝ藏王堂の供僧房であつた所で、後醍醐天皇以下南朝三帝の行在所になつた所である。藏王堂から更に南へ三丁行くゝ【吉水神社】がある。こゝも元は藏王堂の供僧房で吉水院といつてゐたが、明治になつて神社に改められ、後醍醐天皇こ楠正成を祀てある。後醍醐天皇蒙塵の時、先づこの吉水院に入らせられ、後實城寺に移らせ給ふた。當時帝の御製に、

花にねてよしやよしのゝ吉水の、枕の下に石ばしる音

その玉座は今に保存せられてある。又この客殿には文治元年源義經が遁れ潜んだが山僧之を知つて來り攻めたので、義經は遁れて中院谷から多武峰を經て南院の内藤室の十字坊に入つたといふ。吉水神社の前に【勝手明神社】がある。山口神社ともいふ。祭神は天忍穗耳命で、源義經の妾靜がこゝで法樂の舞を奏したといふ社

である。勝手明神の前を左へ降りて、溪を渡つて東へ上るこ【如意輪寺】に出る。この寺は延喜年中日藏上人の開基するこころで、南朝當時の勅願寺である。寺の後に【後醍醐天皇陵】がある。鬱蒼たる老杉に圍まれた暗い御陵が、行く春の落花につゝまれた頃の寂しさを拜したものは、誰か思はずその頰に涙のつたふのを禁ずることが出來やう。誰の詩であつたか『眉雪の老僧時に箒を輟めて、落花深き處南朝を說く』といふのがあつた、悲しい詩だ。

みやこだにさびしかりしを雲はれぬ、吉野の奥のさみだれの空。　後醍醐御製

楠正行が四條畷の戰の征途にこの陵を拜し、髻を切つて如意輪堂に納め、その壁に鏃をもつて一族百四十名の姓名を記した末に扉に『かへらじこかねて思へば梓弓、なき人の數に入る名をぞ止むる』こ彫つけて決死の意を示したこは名高い話で、現に歌を彫りつけた扉こいふが寺寶になつてゐる但しこの話は太平記や吉野拾

遺なごに出てゐる話だが、頗る怪しいもので、第一かへらじこ云々の歌の体から言つても南北朝時代の歌ではない。寺寶になつてゐる扉こいふのを見るこ、馬鹿に立派な新しい扉で彫つけてある字の形からして明かにそれが僞物であるこを物語つてゐるから世話はない。また歴史家にいはせるこ、たこひ正行が吉野の行在所へ訣別にいつたのが眞實こしても、何のために訣別したり死を決したりする必要があつたか頭でわからないこいふ。何こなれば、當時南朝の軍は非常に優勢で、正行の如きは、四條畷戰のあつた正平三年の前年、卽ち正平二年の秋頃から早くも和泉攝津方面に出征して盛んに足利勢をうち破つてゐた。殊に正平二年十二月には堺天王寺の敵軍を殆ご紛碎してしまつたので、北朝の上下が震駭したこいふ位だから、その後一こ月たらずの後の四條畷戰の前にわざ〳〵吉野に訣別に歸るわけもなければ死を決して髻をきる必要もないわけだ。實際四條畷戰の正行の敗北は意外中の意外

の椿事だつたので、南朝方はその敗報をきいて驚愕色を失つたこ共に、北朝方では萬歳を叫んで天下に三十日の觸穢を令した位である。從つて南軍はために意氣阻喪し北軍は頓に振ひ、一擧吉野に迫つたので藏王堂は燒かれ、後村上帝は吉野から十津川を經て紀州伊都郡の穴太に逃れ給ふたのである。如意輪寺から道をもこへ戻つて勝手明神から更に南へ三丁ゆくこ【竹林寺】がある藏王堂の開祖日藏上人が住んでゐた寺で、その庭園は後世小堀遠州が設計したこいふので名高い。この附近はその風景山中第一こ稱せられてゐる所で、こゝから天王橋を渡つて猿曳阪へ出るこ、東の谷一面は櫻をもつて埋められてゐる。こゝを【中の千本】こいふのである。この谷の中で中院谷こいふ所は源義經が免れた時、佐藤忠信が義經のために敵を防いで、山僧横川覺範を討ちこつた所こして名高い。【首塚】こいふのがある。中の千本から更に南に進むこ【布引櫻】【瀧櫻】【雲井櫻】等の名櫻があつて【世尊寺趾】

へ出る。今こゝに保延六年（今より約八百五十年前）の銘のある梵鐘がのこつてある。俗に吉野三郎と稱してゐる。世尊寺跡から二丁ゆくと【吉野水分神社】がある。今の社殿は慶長年間豊臣秀頼の再建した所で、境内の【時雨櫻】といふのが名高い。水分神社から更に五丁上ると【金峰神社】がある。これは吉野山の地主神で、延喜式にも見ゑてゐる古社である。神社の左を少し降ると飛彈の内匠の作つたと傳へてゐる方二間ばかりの塔がある。曾て源義經この塔にかくれてゐたのを山僧に襲はれ、塔の扉を蹶破つて免れたといふので【蹶拔塔】と稱せられてゐる。金峰神社から右へ四丁ゆくと【苔清水】に出る。一寸した小川であるが附近に西行が三年間も住んでゐたといふので名高い。西行の『淺くともよしやまた汲む人はあらじ、われにことたる山の井の水』とよんだのは、この水のことであるといふ。芭蕉は『露とく〳〵試みに浮世そゝがはや』と吟じてゐる、この附近はまた櫻の非常に深い

所で、【奥の一目千本】と稱せられてゐる。こゝから愛染峰、小天井大天井勞を經て「行者參り」で名高い大峰山にゆくのであるが、吉野から尚ほ六里からあるので到底一日では登れぬ所であるから附錄で項を改めることにした。

櫻井線

‖奈良驛より高田驛まで十八哩二分‖

奈良驛　五大都市奈良市の條參照。

京終驛　【大安寺】　驛の西、大安寺村にある。古くは南都七大寺の一で、東大寺西大寺に對して南大寺と稱した大伽藍であつたが、今は田圃の中に小さな堂が遺つてゐるだけだ。

帶解驛　【帶解寺】　驛の東方二丁、帶解村今市にある。本尊は春日作と稱する地藏尊で、清和天皇の御母、染殿が惟喬親王御平產の御願によつて建立せられたものといふ。寺の南に【龍泉寺】がある。これも地藏尊を本尊とし、帶解寺の奥の院と稱せられてゐる。

【山村御所】　驛の東約十八丁にある。本名を圓照寺といふので、寛文年間後水尾天皇第一の皇女の御創建で、代々皇族の尼公をもつて住職とせられたので山村御所の名が起つた。

櫟本驛　【櫟本町】　添上郡の南部大和街道交通の要衝に當つてゐる町で、製茶の產があるので聞ゐてゐる。驛から東三丁のところに【柿本寺】がある。柿本人丸像を安置し、境內に【歌塚】がある。

【弘仁寺】　櫟本町から東約廿五丁にある。小野篁が創建して弘法大師が開基したと稱せられてゐる寺で、空海作と傳ふる虛空藏菩薩を安置してある。本堂は寛永年間の再興である。弘仁寺から更に東北二十五丁ゆくと【正曆寺】がある。正曆年間僧兼俊の創建、建保年中に僧正信興之を中興したといふが、今は再び廢頽してゐる。本尊は藥師如來である。

丹波市驛

【丹波市町】 人口萬に近い山邊郡第一の都邑である。殊にこの町に入るものはその街の整然とした立派さに驚かされるであらう。この地は人も知る如く天理教本部のお膝元として町のすべてが世にゆはゆる『屋敷を拂うて田賣りたまへすつてらてんの命』の絶大な信仰の餘祿で成立してゐるのだから、その立派である所以と同時に、何もこの町の人間が特別にエライわけでも何でもない所以をも共に物語つてゐるわけだ。

【天理教本部】 驛から東九丁、三島にある。教祖は名高い中山おみき婆さん、天保九年から起つて今日では立派な宗教として認められ、その信徒全國に亘つて五百萬と稱せられてゐる。教會で中學を經營し根本的に宗教教育を施してゐる所なぞは中々進んだもので、先年政府に天理教を宗教として認めさせる運動をしたのに關聯して大疑獄を起したが、神樣のおかげでそれも無事に解決した。一時愚民を惑はすこと迷信だとか大分非難もうけたが、こつちから頼みもせぬのに田地や屋敷はおろか、生命までも捧げてくるのは信仰の力で是非がない。迷信だといつても極樂淨土があると思ふのも天國に救はれると信ずるのも見方によつては同じく迷信だ。ごうせ宗教なぞゝいふものの始めはいゝかげんなもので、基督が十字架にかゝつたのも今日でいへば大本教を警察が取り締つたやうなものさ。天理教本部の建築は、明治四十四年の秋からはじめて大正三年の春まで三年越にかゝつて完成した壯麗なもので、禮拜殿、教祖殿、教廳など、その規模の宏大なる、こと全國殆どその比を見ざる程のものである。教祖の墓は本部の北六丁、豐田山西の森にある。非常に立派なものだ。こゝから法隆寺へ天理輕便鐵道が敷設されてある。法隆寺附近からの參詣にはこの線による方が便利だ。毎年春秋の二季の大祭は諸國から雲集する信徒の數幾十萬とも知れぬ大雜閙を演ずる。

【石上神宮】驛の東十五丁、丹波市字布留にある。官幣大社で、崇神天皇の朝伊香色男命が創建したもので古史には『布都大神社』と見にてゐる。神武天皇の東征の時に佩かせ給ふた御劍と素盞男命が肥の川上で八岐の大蛇を斬りたまふた十握劍を合祀した社と世に傳へられてゐるが尙ほ詳でない。然し、古から皇室の尊崇極めて篤かつた社で、殊にこの社へは夥しい武器兵器の類が奉納せられた。垂仁天皇の長子五十瓊敷命が茅渟の兎砥川上宮に座して劍を作らせ、その劍千口を神宮に献納のあつたことが日本書紀にも見にてゐる。つまりこの社は一種の兵器庫のやうなものであつて石上神寶の名は古來非常に重要なものになつてゐた。平安朝の初めにこの石上の兵器を京都へ運ばれた事があつたが神託怪異が屢々あつたので元の通りに納めかへされたといふ。その後ごういふわけか火事でもあつた時であらう神劍類を正殿の背後の石崖の上に埋められたと傳へ、その所へは人が足を入れるこ

とを禁じてあつたが、明治七年教部省の許可を得て發掘したら石室があつて中から古代の刀劍類が多く出た。今之を神宮に奉祀してゐる。但し今の社殿は鎌倉時代に建築されたものである。また神社の附近に【良因寺】がある。一に石上寺といひ、僧正遍照の舊跡だ。布留村の大字瀧村の山中に【桃尾瀧】がある。又の名を布留の瀧といふ。

いまはまた行きても見ばやいそのかみ、ふるの瀧つせあとをたづれて　後嵯峨御製

柳本驛

【大和神社】驛より北十二丁、朝和村新泉にある。大國魂、八千矛、御歳の三神を祀つた官幣大社である。毎年四月一日に執行される俗にチヤン〳〵祭といふ大祭が有名だ。この社の緣に就ては三輪神社の條で述べる。

【纒向】柳本村の南卷向山の西の地で、こゝは【垂仁、景行兩帝の宮趾】である。附近に【穴師兵主神社】がある。崇神朝の創立で、兵主神を祀つてある。その二の

鳥居から二丁ばかり西の地が野見宿彌が當麻蹶速と角力をとつて勝つた所と傳へられてゐる。また柳本村の附近には【景行天皇陵】【崇神天皇陵】がある。殊に崇神陵は甚だ宏大な車塚で兆域六百三間、濠をめぐらした堤に數百の櫻が植へられてあるので春は頗る美しい。

三輪驛

【三輪町】　磯城郡の中央、伊勢街道交通の要衝に當つてゐる町で、酒と素麺の產地として名がある。梅川忠兵衛の淨瑠璃で名高い三輪の茶屋といふのが今ものこつてゐる。新口村は町の西の方にあたる。因に梅川忠兵衛の實說を左に紹介して置かう。正德六年版の『好色入子枕』といふ書物に出てゐるのだ。忠兵衛は大和の豪農增田忠左衛門といふ者の總領で、かたの如き美男で才子、隣に住んでゐた因幡の浪人の娘お吉といふものと人知れずい、仲になつてゐたが、その浪人さる醫者に持參參つきで娘をやる約束をした、そこでお吉は大に驚いて、その醫者といふ

のが利慾一方の男で、持參金がなかつたらこの緣を破談にするといふ話をきいてこれ幸と父が調へて置いた持參金の百兩を窃み出した所を父に見つけられ、當座のがれに百兩の包を垣根ごしに隣の忠兵衛の家へなげこんだが、父は怒つて刀をぬいて背うちにすると、お吉は斬られたものと思つて氣絕したなり遂に蘇生せず死んでしまつた。所で忠兵衛の方でもお吉が金包を投こんだために人から兎や角惡評せられるので、忠左衛門も世間を憚り、忠兵衛を勘當といふ事にして大阪淡路町の龜屋といふ家に養子にやつた。忠兵衛もお吉の事ですつかり懲て、それからは身を愼んで實直に働くので養家の氣うけもよくやがて家督も相續して業務に勵んでゐたが、ある年凧をあげることが流行した時、忠兵衛も一日さる旦那筋から預かつてゐた凧をあげてゐると運惡く糸がきれて凧が落ちた。預かりの凧だから失つては申譯がないといふので凧の落ちた方角に駈つけると、凧は新町廓の槌屋といふ遊女屋の局の

屋根へ落ちた。これが縁になつて槌屋の傾城梅川に馴染み、互に深くなつた末がお定まりの金につまり、遂に爲替の金を私して梅川を身受し、大和へさして駈落をする途中二人とも捕へられ、忠兵衛は寛永七年の十二月斬罪に處せられた。梅川は許されたが尼になつて伏見の片ほとりで忠兵衛の跡を弔つたといふ。これを近松門左衛門が脚色して正德元年の三月に操芝居にかけたのが名高い『冥土の飛脚』である『無殘やな忠兵衛、我さへうき世忍ぶ身に、梅川の風俗の、人の目にたつを包みかね、借駕に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜をあかし、二十日餘りに四十兩、つかひ果して二分のこる、鐘もかすむや初瀬山、餘所に見すて、親里の新口村につきにけり』と例の縦横の妙文で、こう〳〵三輪の茶屋も新口村も天下の名所になつてしまつた。尤も奈良の旅籠屋が一軒のことでない如く三輪の茶屋も今のやうに一軒だけにきめてしまうわけにはゆくまい。新口村も果してその親里であ

つたかどうかは詳でない。

【三輪山】 三輪町の東にある。一に御諸山、又は神並山と稱し、高くはないが杉檜等鬱蒼として滿山を蔽ふてゐる。山上に不動、地藏、藥師の三石像がある。俗に之を奥の不動と稱へてゐる。この山は歴史上非常に古い由緒をもつた山で、古事紀や日本書紀に大己貴命(大國主命)が國作りのときに御諸山に神を祀つたことが見にてゐる。

【三輪神社】 三輪山の西麓にある官幣大社で、大物主神(卽ち大己貴命)を祀つた社である。古史に崇神天皇の七年創建せられたことが見にてゐる。この社は拜殿だけで神殿といふものがない。卽ち三輪山全体を神殿としてゐるのだ。境域三百町歩鬱蒼たる老杉の間に數百株の櫻が點綴してゐるので春は頗る美しい。毎年四月九日の例祭には花見かてらの參詣客で非常に賑ふ。神社の一の鳥居を右に折れてゆくと

街道の傍に【緒環塚】がある。塚の由來に就てはいろ〳〵あるが何れも信ずるに足らぬ。要は三輪の地の古傳說によつて好事な後人の作つたものだ。左に古史（古事記及び日本書記）に見ゑてゐる三輪神社の由來ここの地の古傳說を紹介しやう。

崇神帝の御時世に非常に疫病が流行して多くの人民が死んだ、崇神帝之を憂ひ給ひ、八百萬の神を會へて卜はせ給ふたが、ある夜の御夢に一人の貴人あらはれ、われは城の內に居る所の大物主神なり。我子大田田根子といふ者をしてわれを祭らせ給はば國內平かなるべしと申した。その後神淺茅原目妙姬、大水口宿彌、伊勢麻績君の三人が期せずして同じ夢を見たといつて天皇に奏していふには、昨夜夢に一人の貴人あらはれ、太田田根子をして大物主神を祭らしめ、磯長尾市といふ者に倭國魂神を祀らしめたまはば天下平かなるべしと申したといつた。そこで天皇は直に國中に令して太田田根子といふ者を搜しもとめられたが、河內茅渟の縣陶といふ所に

居つたのでつれて來た（茅渟の陶は今の泉北郡陶器庄村の事である）天皇、太田田根子に汝は何者であるぞと問はれると、僕は大物主神が活玉依姬に產ましめた子であると申した。大物主神が活玉依姬に子を產ませたことには面白い傳說が古事記に載つてある。この傳說は卽ち三輪の地名に關する古傳說で、名高い妹背山婦女庭訓の淨瑠璃にも材料がとられてゐる。卽ち活玉依姬といふのは非常に美しい乙女であつたが、ある夜一人の美しい若者がやつて來て乙女と情を通じた。それから每夜おそくなるとその若者は乙女のこころへ通つて來たが、女は遂に姙つた。その父母は之を知つて大に驚いて男の名を問ふと。女は所も知らねば名もしらぬ美しい男であると答へた。そこで父母はそれが何者であるかを見究めるために長い糸の束をもつて來て、今夜その男が來たらその衣服の裾に絲の端をぬひつけて置けと女に誨へた女は敎へられた通りにしたが、翌朝糸を見ると、戶の鉤の穴から絲が外へ續いてゐ

て、手許には僅かに三勾しかのこつてゐなかつた。外へ出てゐる絲をたぐつてだづねて行くと御諸山に至つて絲の端がとまつてゐた。卽ち女に通つたのは御諸山の神（卽ち大物主神）であつたので、あとに殘つた絲の三勾からこの地を三輪といふに至つたといふのである。

さて。崇神帝はその活玉依姫が姙つて產んだのがこの太田田根子であるといふことを聞しめされて大に喜び給ひ、仍ち太田田根子を神主として三輪山に大物主神を祭らしめ給ふた。これが今の三輪神社の由來である。先に述べた緒環塚といふのは活玉依姫の墓であるといひ、手許にのこつた三勾の緒を埋めた所だのと傳へてゐるがその由來もこれでわかるわけだ。さてまた神淺茅原目妙姫以下三人の者が大物主神を祀る外、市磯長尾市をして倭國魂神を祀らしめ給へといふ夢を奏してゐるが崇神帝は大物主神を祀り給ふとともにまたその如く長尾市をして倭國魂神を祀らせたまふ、たと日本書記に見えてゐる。これが今日の大和神社（前記柳本驛の條參照）である。

櫻井驛

【櫻井町】　初瀨街道の入口に當る交通の要衝で、この町から初瀨町に初瀨軌道が通じてゐる（別項參照）

【安倍文珠院】　驛より西南方八丁、安倍山の南腹にある。陸奥の永井、丹後の切戸の文珠とともに我國三文珠の一に數へられてゐる所で、大化元年安倍倉橋麻呂の草建に係はるといふ。むかしは大日如來を本尊として居たが、一夜山中鳴動して東南の石窟の中から黃金の文珠佛が出現した。佛師快慶仍ち丈九尺の文珠像を刻み、その額に石窟出現の黃金像をはめて安置したのが今の本尊であるといふ。

【倉橋宮趾】　多武峰村倉橋の地で、古崇峻天皇の都のあつた所で【崇峻天皇陵】が附近にある。こゝから南へ二十五丁登ると多武峰の【淡山神社】に達する。

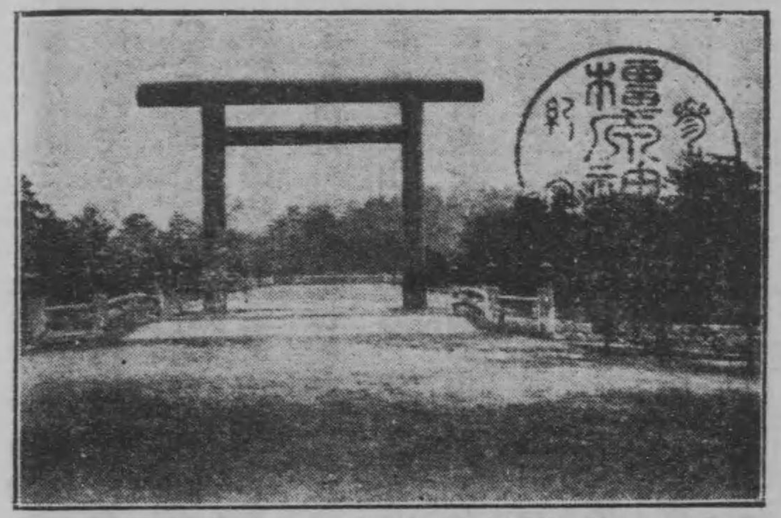
【淡山神社】　倉橋の南に聳ゐてゐる多武峰の中腹にある別格官幣社で、藤原鎌足を祀つた社である。鎌足の長子定慧入唐歸朝の後、攝津安威山から父の遺骸をこゝに移し葬り、唐の淸凉山寶池院の塔に模して寺塔を作りこの地に建てたのがこの社の草創である。從つて維新前までは神佛混淆の社であつたが維新以後神社格になつて今日に至つた。定慧の建てた塔は高さ四丈三尺十三塔で今に境内にのこつてある。歷代藤原氏の盛大ここもに社は甚だ繁榮し今にその社殿樓閣壯麗を極めてゐる。殊に本殿は、外部は金碧燦爛として人の目を驚かすが內部を見るこ、これはまた反對に總素木作りで淸楚を極めてゐるこいふ極めて凝つた建築で、天井はすべて唐木をもつて張つてある。これを伽羅の天井こいつて名高いものだ。鎌足の墓は本社から北へ六七丁、字高嶽にある。山上の眺望が極めて廣濶である。またこの山中には楓櫻等が多いので春秋の風光頗る美しい、その風光こ社殿の美こは世に關西の日光こ

稱せられてゐる位である。山中に瀧があつて、これも日光に擬して【華嚴瀧】こ名けられてゐるが、これはお話にならないものだ。

【天の香具山】　櫻井町の西に獨立してゐる六百六十尺の山で神代からの名山である。神武天皇の時にもこの山の土を取つて祭器を作りたまふたここが史に見ゐてゐる。また附近一帶の地は繼体天皇以後屢々皇居を定めたまふた所である。香具山の北西に【耳成山】がある。田圃の中に獨立してゐる高さ十餘丈の小丘に過ぎないが、これ亦古來史上に名高い山で、明治四十一年の陸軍大演習には先帝の御野立所になつた。またこれより少しく離れて西南方に【畝傍山】がある（畝傍驛の條參照）天の香具山、耳成山、畝傍山の三を合て、【大和三山】こして世に著はれてゐる。

畝傍驛

【畝傍山】　驛の南方にある約七百尺の山でその東南麓に【橿原神宮】及び【神武天皇陵】があるここは世に知らぬものはあるまい。神宮は明治二十三年神



畝傍橿原神宮一ノ鳥居

武天皇建國の大業を完成し給ひし地を卜して創建せられ天皇並にその皇后を奉祀せられたもので、神殿は京都内裏の内侍所、拜殿は神嘉殿を賜つてこゝに移したてられたものである。神武天皇陵は神宮の北にある。兆域周圍四百七十間森嚴を極めてゐる。御陵は後世全く不明になつてゐたので元祿以後學者の間にも種々な說があつた、遂に文久年間戸田大和守の調査によつて始めて今の兆域を封ぜられ、維新以後更に規模を擴張して今日に至つたのである。

【久米寺】 橿原神宮の南四丁、白橿村久米にある。聖德太子の御弟久米皇子の創建こいふ。養老年中唐僧善無畏がこゝに留錫してゐたこいひ、弘法大師もまたこの寺に居たことがあるこいふ。本堂には藥師如來、觀音堂に十一面觀世音こ久米仙人の像を安置してある。久米の仙人ここの寺の關係は一向わからない。建築は何れも近代再建のものだ。

【橘寺】 久米寺の東南、高市村橘にある。上宮院菩提寺こいふのが本名で、推古天皇の十四年聖德太子の御創立、金堂は太子殿こいつて太子の像を安置してある。

【岡寺】 橘寺の東方五丁、高市村岡にある。義淵僧正の開いた眞言宗の寺で、天智天皇の祈願所になつた。本尊は如意輪觀音で、西國七番の札所である。

【弘福寺】 橘寺の北二丁にある。古の川原寺の遺物で、寺寶になつてゐる持國天こ多聞天の像は弘仁期の傑作こして學者美術家の間に名高いものである。

【飛鳥神社】 岡寺の北方、飛鳥村鳥形山にある神社で、祭神は大物主命の子といふ。神社の附近に酒槽石といふのがある。その面に七條の槽溝を刻んであるが、これは上古神酒を作つた所だといふ。附近に大物主神に關係のある神社があることを見ると、この神酒醸造には三輪の大物主神社に關係があつたかも知れない。崇神天皇が三輪に大物主神を祭りたまうた時（前記三輪神社の條參照）高橋の邑人、活日といふものを大物主神の掌酒となされ酒を作らしめ給ふた。活日乃ち神酒を奉り神宮の宴會に『この酒は吾酒ならず大倭なす大物主の釀し酒、幾久幾久』と歌つたので、崇神天皇公卿ともにこれに和して歌を詠じたまふたことが史に見はてゐる。

【飛鳥大佛】 飛鳥神社に近き【元興寺の趾】にある丈六の大佛像である。止利佛師の作といふので甚だ名高いものだ。この元興寺といふのは往古聖德太子が蘇我馬子

ともに創立せられた寺で、飛鳥寺といつて非常に宏大なものであつたが後平城に移されてしまつて今は廢殘の堂宇がのこつてゐるだけなのである。中大兄皇子がこの寺で蹴鞠の遊びをなされた時に中臣鎌足が見出されて遂に力を協せて大化の革新を成就したことは名高い歴史上の話である。尙ほこの附近に【大官寺趾】がある。前記川原寺及び飛鳥寺ともに三大寺と稱せられたものだが、今は礎石だけがのこつてゐる、また附近の大字飛鳥の地は允恭天皇の【飛鳥河邊宮趾】の地で、八釣山は【顯宗天皇の宮趾】である。

猶ほ、この外畝傍驛附近の地は上古史に於ける文化の中心として、代々天皇の宮居を定めたまふ地であるから御陵の如きも非常に多い、白橿村には神武天皇陵の外に、【綏靖天皇陵】【安寧天皇陵】【懿德天皇陵】【宣化天皇陵】【孝元天皇陵】高市村には【天武天皇陵】【持統天皇陵】阪合村には【欽明天皇陵】【文武天皇陵】越智岡

村には【齋明天皇陵】がある。

高田驛 關西和歌山線同驛の條參照。

初瀬軌道

‖櫻井より初瀬まで‖

長谷軌道〔營業時間〕午前五時頃より午後十時頃まで、一日二十三回往復〔賃金〕櫻井初瀬間十三錢

櫻井 【音羽寺】多武峰の東北、音羽山の麓にある。本名を善法寺といひ、天平勝寶元年沙門心融の草創といふ。本尊は千手觀音である。後の山中に【音羽瀧】がある。高さ三丈餘で夏は頗るいゝ所だ。その他附近の名所舊跡は關西櫻井線櫻井驛の條參照。

宇陀ケ辻 この附近の地は神武天皇東征の時通御になつた史上で名高い地である金鵄が飛んで來て天皇の弓弭に止まつたので、その光のために賊軍眼眩み大敗をな

したこいふ史話に名高い所はこの附近外山の地のことであるこいふ。停留所の東南谷村に【鳥彌神社】がある。神武天皇卽ち金鵄の奇瑞に感じてこゝに天神を祭りたまふた所こいふ。この東數丁に【欽明天皇陵】がある。

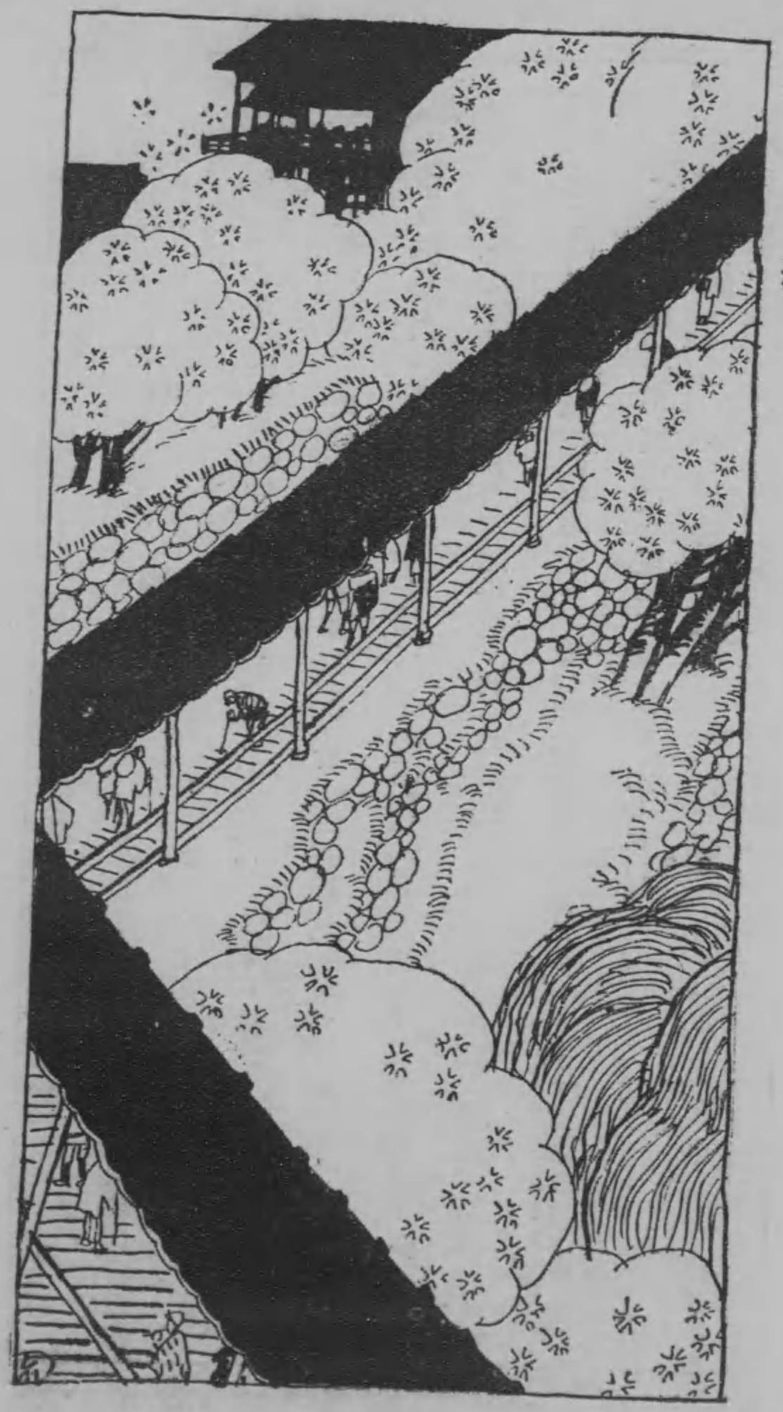
黒崎

【泊瀬朝倉宮趾】停留所の傍にある。雄略天皇の宮趾である。またこの附近出雲村に武烈天皇の皇居【泊瀬列城宮趾】がある。

初瀬

【初瀬町】初瀬軌道の終點、名高い【長谷觀音】の所在地こして又郡の東部に於ける交通の要衝こして殷盛を極めてゐる。

【長谷觀音】初瀬山の中腹にある。新義眞言宗の本山で、西國八番の札所である。天武天皇の白鳳三年、今の奥の院の地に三重の塔をたて、鑄銅板千佛多寶塔を安置した。後聖武天皇の神龜四年に德道僧都が勅を奉じて諸國に勸進し新に伽藍を起した。これを新長谷寺こいつて今の長谷寺の創である。それに對して白鳳三年のもの



初瀬

初瀬

牡丹で名高い初瀬の寺は櫻も亦捨てたものでない、大和の櫻井驛から初瀬へは電車が通ふ。町の兩側は旅籠屋 御支度所 料理茶屋 名物牡丹煎餅の店などで中々賑はしい。山門からつゞく長い石段の兩側、右折左折する廻廊の軒を越して眼界は次第に開ける。遠近に咲き誇る花の間から、各坊舍の甍、築地、石垣などの穩見する風趣は中々いゝ。その回廊を挾んで左右凡て牡丹の花畑になつてゐる。花の頃の繁昌は今更めて喋々する迄もない。

長谷寺

を元長谷寺と言つた。その鑄銅板多寶塔は現存して寺寶になつてゐるが、頗る精巧なもので、當代の繪畫彫刻の好標本として世に推賞せられてゐる。新長谷寺は天平七年を以て上棟し十九年を以て全部竣成した。其後度々火災にかゝり今の堂宇は慶長年間の造營である。本堂は南面八棟造りで桁行十五間、梁行十四間半、十一面觀世音を安置してある。内陣の柱、厨子の扉等皆金泥を塗つてあるので壯觀を極めてゐる。その外佛堂僧房學寮など本堂に續いて初瀬山の上下左右に連り寺域二萬六千坪

壯麗稀に見る巨刹である。この寺で名高いものは三折九十二間の廻廊で、仁王門から本堂へ遠く長く續いてゐる。廊下は花崗石でしきつめ、廊角毎に鐵燈籠が掲げてある。この廊下の夜の風情は實に筆舌に盡し難い程詩趣に富んでゐる。また方丈は紀州根來寺のものを移したもので、小池坊と稱へ頗る壯麗なものであつたが大正二年に燒てしまつた。この寺の附近の地は古來櫻で名高かつた所で、公卿百官の優游するものが頗る多かつた。萬葉集や古今集の中にも初瀬、泊瀬、初瀬川等の名によつて幾度となく吟詠されてゐる。春のみでならず楓も多いので秋の風情もまた一入である。近時また牡丹を多く植へたので、この頃では櫻よりも牡丹の方が名高い位だ。

春の夜やこもりゆかしき堂のすみ　ばせを

【榛原町】初瀬町の約東一里半、櫻井初瀬方面から伊勢及ひ伊賀地方へ通ずる街道

の分岐點になつてゐる所で、附近は神武天皇東征の時の古蹟の地で古い地名が今に多く存つてゐる。

【室生寺】榛原町の東約二里、室生村にある眞言宗の名刹である。天武帝の白鳳九年役小角が開基し、弘法大師が之を再興したと傳へ世に室生の大師として知られてゐる。本堂は灌頂堂といひ空海作といふ如意輪觀音を安置してある。其他金堂、彌勒堂、五重塔など壯麗な堂宇が並んでゐるが、中にも五重塔は特別保護建造物になつてゐる。

【國見嶽】室生山の東、曾爾村の上に聳にてゐる高峰で、神武天皇八十梟師を誅したまふた古蹟である。この附近一帶の山間は頗る瀑布が多いので、室生村には【瓢瀧】【並松瀧】【瀬戸瀧】曾爾村には【岩屋瀧】【長走り瀧】【布引瀧】【中山瀧】などがある。この中で最も大きいのは布引瀧で幅七尺、高さ二十丈四尺、頗る壯觀を呈

してゐる。それに次いで大きいのが長走り瀧で高さ十五丈ある。この外御杖村には【奥山瀧】【三の瀧】がある。三本松村附近には【擔瀧】【西瀧】【流れ瀧】【鎌倉瀧】【龍神瀧】がある。この山の瀧巡りをするだけでも夏の行樂には最も適してゐるが一日の旅としては少しむつかしい。

附錄

とびくの遊覽

伊勢まゐり

揃の菅笠手甲講絆がけで、講の世話方が聲自慢のやあここせいの音頭につれて、五日十日の道中を威勢よくふりこんだ伊勢詣は昔の事だ。交通の開けた今日では神戸、大阪、京都、奈良附近からならば少し無理をすれば一日の中に默つて行つて默つて歸つて、それで參詣がすませられるといふ便利な世の中になつた。然し何もさう韋駄天が洗足詣りでもするやうに急ぐ要もなければ、やはり泊りかけで附近の名所の一つ二つは見がてらに行く方が興が深い。それも長い時日はいらぬ、ほんの土曜から日曜にかけて一夜泊りの二日の旅で十分である。汽車の便は大阪奈良からは

關西本線によつて龜山から參宮線にのりつげばよい。京都からは關西奈良線で木津から關西本線にのりつぐべきである。（大阪京都からは何れも山田行直通列車がある）和歌山からは和歌山線で奈良を經て關西本線にのりつぐか、或はすぐ船で鳥羽に出て參宮すればよい。

參宮線に入つて名所こもいふべき所は龜山驛から約東一里に

【能褒野神社】　がある。日本武尊が薨じたまふた所である。尊の靈が白鳥に化して飛んだことは河南線古市驛の白鳥陵の條にのべたから參照すべし。次に

【津市】　は舊藤堂氏三十五萬石の城下で國内第一の都會である。舊藩主の別業が今

【津公園】　になつてゐる。櫻楓躑躅等が多いので名高い。市の東、岩田川の口附近一帶の海濱が

【阿漕浦】　である。阿漕平次が殺生禁斷の場所に網を入れたといふ話で名高い所だ

海濱の風光が極めて美しい。近年海水浴場が出來たので夏は非常に賑ふ。

【松阪】　松阪驛の所在地である。綿布の産地として昔から有名な所で、それに本居宣長の生地として一層世に名高い。町の西南山室山に翁の墓がある。【松阪公園】には翁の舊宅【鈴の家】を移し建てられてある。また翁を祀つた【山室山神社】も園内にある。松阪驛を過た濠車がやかて宮川の鐵橋を渡ると山田驛に入る。卽ち伊勢神宮の所在地

【宇治山田市】である。伊勢神宮は内外兩宮に別れてゐて、内宮と外宮とは三十町から隔つてゐる兩宮參拜には山田市から伊勢電鐵が通じてゐるからよるべきである。（山田内宮間片道十六錢往復二十六錢、午前六時半より午後七時まで八分乃至十六分毎發車）また兩宮に參拜するものは是非二見浦を見ねばならぬ。これにも電車が通じてゐるが山田からは内宮を經て二見へまはる乘車券を發賣してゐるから、最初

から之を購入して置く方が便利だ（山田より内宮を經て二見まで乘車賃三十三錢、山田より二見を經て内宮まで二十九錢）

【伊勢外宮】　驛より五丁、豐受大神宮と申す。もと丹波の國比沼の麻南爲原に鎭座ましましたのを、雄略天皇の御世にこゝに鎭め給ふたもので、百穀發生のことを掌り給ふ神である。正殿は南向萱葺の堀立柱で、これは我國古代の建築法をそのまゝに襲用してあるのだ。すべて素木作りの清楚を極めたもので森嚴自ら襟を正さしむるものがある。

御成道と徽古殿

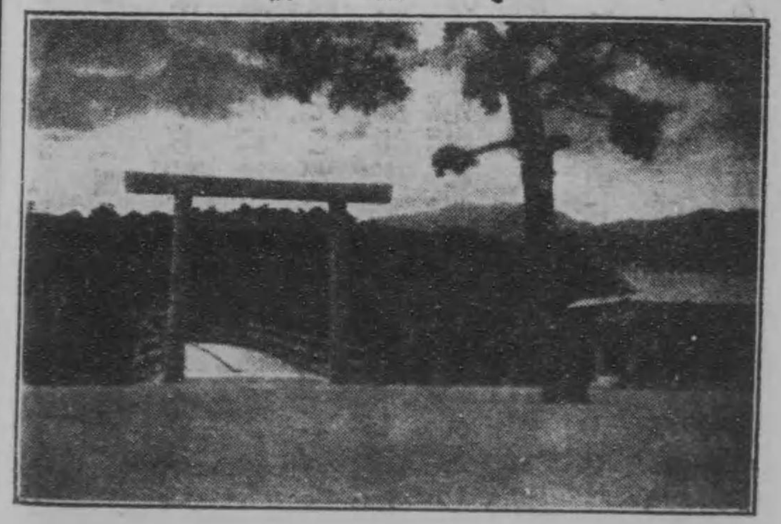
外宮御神殿

何ごとのおはしますかは知られねども、ありがたさに涙こぼるゝ　西行

【伊勢内宮】　は外宮から約三十丁、【五十鈴川】の畔にある。五十鈴川には【宇治橋】がかゝつてある。橋を渡るとそこが【内宮神苑】になつてゐる。廣さ二町五反歩老杉古檜鬱蒼として幽邃を極めたもので、苑内に明治二十七八年役の戰利巨砲及び明治三十七八年役の戰利巨彈が据られてある。この神苑の奥に内宮は鎭まります皇太神と申し、御魂代は三種の神器の一なる八咫の御鏡である。もとは宮中に奉祀してあつた

ものを崇神天皇の御世、大和の笠縫ひ邑に遷し祀らせたまひ、垂仁天皇の御世この地に齊き祀るに至つたことは史上で誰知らぬものもあるまい。正殿の結構は外宮と同じである。内外兩宮が皇室の宗廟として擧國尊崇の中心になつてゐることもまたこゝで今更らしくいふまでもない事だ。

宇治橋



とこしへに民安かれと祈るなる、我世を守れ伊勢の大神　明治天皇御製

神風の伊勢の内外の宮はしら、ゆるぎなき世をなほ祈るかな　照憲皇太后御製

【二見浦】　山田から二里、伊勢灣に臨んだ海濱で、風光の明媚なること既に天下に著はれてゐる。殊に海中から突兀としてぬき出てゐる【夫婦岩】の奇勝は名高いもので、漂渺として果もなく連つてゐる太平洋のあの水天髣髴たるあたりから、遲々として上る朝暾をこの岩の間から望んだ時の雄大な光景は到底筆舌のよく盡し得るところではない。

鳥羽港

【朝熊山】　二見浦から南方一里、海拔一千七百尺の山で、風光の美は伊勢第一との稱がある。山頂に【朝熊神社】がある。山中、富士見臺と

いふ所は天氣のいゝ日には富士山が見ゆるといはれてゐるので名高い。

【鳥羽港】 參宮線二見驛の次驛で、同線の終點である。（二見浦より東約一里）驛前に屹立してゐる。【日和山】といふのは高さ僅かに七八十間の小丘であるが海を望んだ風景が頗るいゝので名高い。前に答志島阿波羅岐島、神島菅島、阪手島安樂島なご羅列しその附近の風光陸前の松島に似てゐる。鳥羽港からこれ等の島巡りの巡航瀧船が出る。この島の中でも菅島の海女は名物で、妙齡の海女が小桶をかゝへて海に出沒してゐる光景は頗る奇觀である。また神島には近年無線電話の裝置が設けられたので名高い地になつた。尙ほ附近には【鳥羽城趾】【鳥羽造船所】【同商船學校】等がある。鳥羽から南約三里半、【神明浦】には【眞珠養殖場】がある。鳥羽にゆくものは是非見るべき所であらう。和歌山から船で鳥羽港に上つたものはこゝに記した反對の順序に參宮すべきである。

琵琶湖巡り

琵琶湖の勝は古來『近江八景』の名で人口に膾炙してゐる所であるが、その他【竹生島】【多景島】等八景以上の勝が湖中に散在してゐる。八景を探らむとするものは是非ともこれ等の勝地を併せ見なければならぬ。遊覽には大津から太湖汽船會社の遊覽船が出るからそれによる方が時間の上から言つても、費用の點からしても便利である。遊覽の順序は大津から乘船して、堅田、小松、大溝沿岸の勝を見つゝ竹生島に上陸、島中の辨財天に參詣して、再び船に乘じて長濱から彦根附近沿岸の名勝を見つゝ大津に歸着するのである。無理をすれば一日がけで遊覽が出來る。即ち朝七時頃大津を出て大津に歸るのが午後十時頃になる。然しこれは京都からならば兎に角、他の大阪神戸附近からでは非常に忙しいので樂しむ方より疲れる方が甚だし

いから、やはり一泊がけの方が悠々たる行樂を恣にすることが出來る。卽ち午前中に大津に着いて附近の名勝を探り、午後一時頃に乘船して竹生島に上陸一泊、翌朝湖東の沿岸を見つゝ午後三時過に大津に歸着するのである。左にその重なる名勝を紹介しやう。先づ近江八景と云へば(一)三井晩鐘(二)唐崎の夜雨(三)堅田の落雁(四)比良の暮雪(五)矢橋の歸帆(六)瀨田の夕照(七)石山の秋月(八)粟津の晴嵐である。何れも東海道線大津驛、石山驛、草津驛の條に詳しく說明したから、本項では見物の順序に從つて名前をあげるに止めて置く。

【大津市】 三井寺その他附近の名所舊蹟は東海道線大津驛參照。

【唐崎】 右に同じ

【堅田浮御堂】【比良山】 同上、右何れも船中から望み見ることが出來る。

【竹生島】 東淺井郡に屬する湖中の一孤島で、周圍約一里、奇巖兀突として削立してゐる上に、老樹鬱蒼として湖水に映ずる風景は實に絕佳である。島上に【都久夫須磨神社】【辨財天の祠】【觀音堂】等がある。殊に觀音堂は伏見桃山御殿の建物を移したもので、華麗目を驚かすものがある。西國三十番の札所になつてゐる。寺號を寶嚴寺といひ賴めば坊で泊めてもらふことが出來る。夜の竹生島は實に幽邃閑寂を極めたものだ。もしそれ月明かに星稀なる夜、ひた〳〵と岸を洗ふ小波金鱗を漂よはす美しさを見るものは、身いつしか羽化して仙境にあるやうな心地がするであらう。

【膽吹山】 竹生島から東、長濱に向つて船が進むとその前面に見ゐる高峰がそれである。海拔四千五百四十五尺の峻峰で、項上まで一里二十丁、江州第一の高山である。日本武尊が東征の時この山の妖神を討ちたまふたが、遂にその毒に當つて伊勢の能褒野で薨じ給ふた有名な傳說のある所だ。中腹以上は草ばかりの山で、織田

信長が外國から藥草を輸入してこゝに栽培せしめたものだと傳へてゐる。伊吹艾が世に名高い。また高山植物の標本採收に登山する者が多い。近年スキーが流行するので、冬も多くの登山者がある。膽吹の左の方に【賤ヶ嶽】が見ゐる。天正十一年羽柴秀吉と柴田勝家が戰つた古戰場として人のよく知る所である。

【長濱町】　湖北最大の町で、米原から北陸に向ふ交通の衝にあたつてゐる。此地の産物に縮緬は世に所謂濱縮緬の名で天下に響いてゐる。その外蚊帳生糸眞綿なごまた名産である。同町神明町にある【八幡神社】は延久元年源義家の創建する所で、毎年九月十五日の祭典は長濱祭りといつて近畿でも名高い壯麗な大祭である。

【彦根町】　東海道線彦根驛參照。

【多景島】　彦根から約五十丁湖水の沖にある孤島である。周圍五丁の小島であるが奇巖屹立した間に松竹なご鬱蒼と茂つてゐる。島上に【見塔寺】といふ日蓮宗の寺

がある。この附近は頗る景趣に富んだ所で、多景島の名起つた所以である。南へ少し離れて【沖の白石】【沖の島】なご點々としてゐる風光また絶佳でゐる。何れも船中から望むことが出來る、

【長命寺】　東海道線八幡驛奥の島の條參照。

奥の島から大津に向ふ途中左の方に【矢橋の浦】（東海道線草津驛の條參照）【瀬田の橋】（東海道線石山驛の條參照）等が見ゐる。【石山寺】【粟津ヶ原】なごは船をすて、大津から陸路によらねばならぬ。（東海道線石山驛の條參照）

養老の瀧

古元正天皇の御代酒のすきな親をもつた一人の孝行息子が、酒代に窮して山水を汲んだら、それが酒になつたといふ話で名高い養老の瀧は、美濃の大垣から三里、養老山中にある。濕車の便は大垣驛で降りて老養鐵道にのりかへ養老驛で下車、驛から約十八丁である。まづ驛から四五丁ゆくと西側は一面の梅林になつて【養老寺】の前に出るそこから約十丁ゆくと【養老神社】がある。神社の横に石を疊んで水を湛へた泉がある昔孝子が汲んで酒になつたといふ水はこの泉で、養老改元の詔勅に『多度醴泉』と見えてゐるのがそれである。今は唯の水に過ぎないのは親不孝者が多い加減だらう。また附近は路の兩側一面の櫻で、春は頗る美しい。神社から四丁上ると養老の瀧に達する。その高さ十丈五尺、幅十二尺、蓼々として落つる水の下は一枚岩で、水の深さは漸く人の膝に達する位なものだ。瀧の眞下まで行くことが出

來るから、夏の瀑浴には最も適してゐる。またこの附近は楓の名所として知られてゐる所で、秋の美觀は一層である。瀧の北方に【元正天皇行宮趾】がある。養老元年九月、及び翌二年九月の兩度、天皇この瀧に行幸あらせられた。瀧から再び養老驛に引きかへして池野線にのり老かへ池野驛で降り道を揖斐町瀑の方面にこると【谷汲寺】に布出る。西國三十三番の靈場として名高い所で、草創は桓武天皇の延暦十七年、開基は豐然上人、十一面觀音を本尊にしてゐる。本名は華嚴寺

こいふので、上人初めこの地を開いた時、巖を破るこその間から油が湧き出た、即ちそれをこつて佛燈に供したので谷汲寺の名が起つたこいふ。

長良川の鵜かひ

長良川の鵜飼はその由來する所頗る古いもので、桓武天皇の延暦年間（今より千餘年前）既に川の邊りに、七人の鵜匠があつて香魚を朝廷に献上したこ傳へられてゐる。織田信長の頃に鵜匠の制が定められ世祿を給された。德川家康や豐臣秀吉も遊覽した事があつて、その頃から毎年五月から八月まで月に二回づゝ鮎鮨を江戸城に送らしめたこいふ。近來交通の便の開けたこゝもに鵜飼を見に來遊するものが非常に殖へ、その名はいよ〳〵世に高くなつた。毎年五月から十月中旬まで、闇の夜を選んで船を出し一組五艘乃至七艘、船毎に篝をたき、鵜匠が鵜をつないだ十二本の綱を打ちさばきながら、上流から漁して下る樣は實に天下の奇觀である瀛車の便は東海道線岐阜驛下車、市内電車で長良橋まで行くべきである。附近から遊船が出る。尙ほ、長良川附近には【稻葉山】又の名【金華山】その北に【岐阜古

城趾】西麓に【伊奈波神社】南麓に【瑞龍寺】なご見るべき所が多い。殊に伊奈波神社附近は楓と櫻の多い所で、まだ瑞龍寺の附近は梅林があるので春秋ともに美しい所だ。

北陸の温泉

北陸で加賀の山中温泉の名は世に誰知らぬものもあるまい。然し温泉は山中のみならず、附近の山代粟津等にもある。少しく足をのばせば能登の和倉温泉なご、これ亦世に名高い温泉である。滊車の便は、東海道本線米原驛から北陸線によるべきであるがもし時日に餘裕をもつ人ならば途中々々の名勝をも併せ探るべきであらう左に極めて大略の案内を記す。

【敦賀港】我國と露領浦塩との交通の要衝としてこの港の名は誰れ知らぬものもないから事々しく說かぬが、言ふまでもなく港灣の設備規模ともに頗る宏大で實に堂々たるものである。但し敦賀の町は餘り立派といふわけにはゆかないが、隨分と小汚い小さな商店の陳列窓にも、露西亞語で書いた廣告ビラを張つてゐる所なごはさすがに他所で見られぬ圖だ。附近で見るべき所は、仲哀天皇を奉祀した官幣大社

【氣比神社】尊良、恒良兩親王を祀つた【金崎神社】武田耕雲齋藤田小四郎等を祀つた【松原神社】等である。殊に金崎神宮は南朝の哀史をかざる金崎城趾で、城陷り尊良親王が自刄したまふた地だ。神社は山の中腹にあつて、そこから敦賀灣を眺めた景色が非常にいゝ。

【福井市】福井縣廳の所在地である。この地古くは北の庄といつて柴田勝家が據つた地で、この城は卽ち慶長年間結城秀康が封ぜられて改築し、代々松平候の居城となつて今日に及んでゐる。市内で見るべき所は【九十九橋】【足羽山公園】等である右の中九十九橋は、長さ八十七間幅三間二尺、半石造半木造の建築で。頗る奇巧を極めてゐるので日本三奇橋の一として名高い、福井驛から東四里、志比谷村に曹洞宗の總本山として名高い【永平寺】がある。寬元二年道元禪師の開基、佛殿伽藍の壯大なる、實に我國有數の巨刹である。

【蘆原温泉】金津驛から西北約一里、蘆原村にある。泉質は鹽類泉、皮膚病、消化不良等に効があるので浴客が多い。

【山中及附近温泉】【山中温泉】は大聖寺驛から南約三里、大聖寺川の上流にある温泉で、泉質は塩類性、常温度百八十度、レウマチス、膀胱加答兒等に特効がある。附近の風光頗る幽邃なもので、【蟋蟀橋】【黑谷橋】等の名勝がある。この温泉は聖武天皇の朝僧行基藥師の靈告によつてこの泉を發見し、中古久しく廢絕してゐたのを、源三位賴政の舊臣長谷部信連がこの地に來て脚を痛めてゐた白鷺が頻に浴してゐるのを見てその靈泉あることを知り再び浴槽を開いたと傳へてゐる。

山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ　芭蕉

尙は温泉附近の地は世に山中塗と稱する漆器の產地として名高い所だ。

山中の東北方山代村に【山代温泉】がある(大聖寺驛より東約一里半)これも山中

温泉と同質の鹽類泉で、常温百六十五度。附近の風景は山中に一籌を輸するが大きな旅館浴槽の設備等間然する所のないい、温泉だ。これも行基が發見したものと傳へてゐる。附近に【藥王寺】【服部神社】等がある。また同村越中谷に【九谷陶器製造所】がある加賀の名產九谷燒の製造工場で世に名高いものだ。

大聖寺の次驛動橋驛から西方約一里餘【片山津温泉】がある。承應年間大聖寺藩主前田利治の發見したものと傳へ、泉質は鹽類泉で硫酸を含み、温度は百六十度内外、

加賀山中温泉蟠蟀橋

レウマチス、慢性皮膚病、婦人病等に効がある。温泉場としての設備は山中山代に比しては大に劣るが、眞に病を養ふものに取つては却てい、かも知れない。温泉の附近は風光頗る明媚で、前に鏡のやうな【柴山潟】を開き靜かな湯の街のたゝずまひが、水に映つてゐる狀は繪のやうである。

動橋驛の次驛、粟津驛の東方約一里餘に【粟津温泉】がある。泉質は硫黃性、温度百十六度、花柳病、神經系統の諸病に効がある。この温泉は養老二年泰澄大師の發見したと傳へられる古いもので、浴場旅館の設備等中々整つてゐる。

以上各温泉の交通は温泉電軌々道が開けてゐるのでそれに依るのが最も便利である

〔賃金〕大聖寺より山中まで二十四錢、山代まで三十七錢、粟津まで三十九錢、片山津まで三十六錢、動橋より山代まで十二錢、山中まで二十八錢、片山津まで八錢、粟津温泉より粟津驛前まで九錢

山中温泉附近を遊覽する者で餘裕のある人は是非金澤まで足をのばして見る要が

あらう

【金澤市】　前田候百萬石の舊城下、石川縣廳の所在地として北陸屈指の大都會である。この地見るべきは卽ち城趾にある【兼六公園】である。岡山の後樂園、高松の栗林公園と共に日本三大公園の一で、世に鳴つてゐることは更めてこゝに記す要もなからう。こゝは文政年間前田金龍候が經營した庭園を公園に解放したもので、その結構規模は宏大、幽邃、人力蒼古、泉水、眺望の六を兼ねてゐるといふので、白河樂翁候が兼六と命名したのである。

兼六公園霞ヶ池

以てその全豹を覗ふことが出來るだらう。敢てこゝにその情景を記述するの贅を省いて置く。

金澤から更に東北に走つて、高岡塗漆器で名高い【高岡市】を過ぎ津幡驛から七尾線に乘りかへて能登半島を北上すると【七尾港】がある。こゝは能登半島人文の中心地といふべきで海陸運輸の要衝である共に、浦塩朝鮮等との交通の要港である。七尾町から西北二里半に【和倉温泉】がある。こゝは山中山代と並稱される我國有數の温泉場で、泉質は鹽類泉、温度百八十度内外、レウマチス、貧血等に特効がある。地は七尾灣に臨んで海上指呼の間に能登島、机島、種島、唐島等の翠嶋散在する風光實に絶佳である。

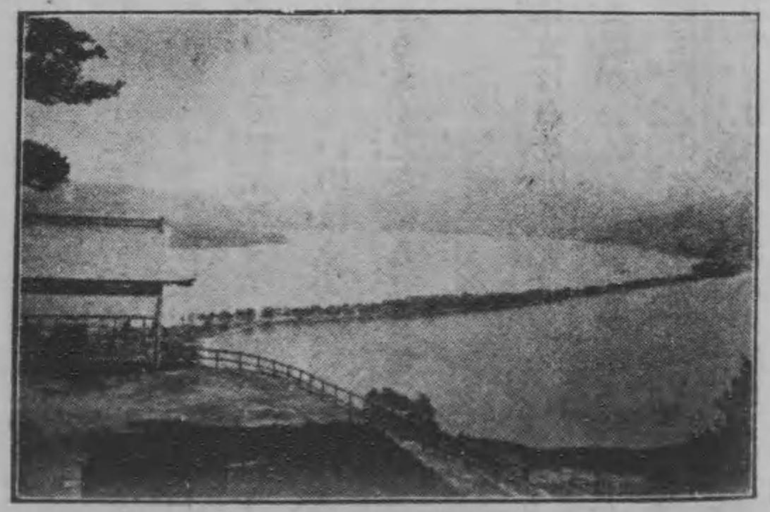
天の橋立及その附近

日本三景一として天の橋立の名は誰知らぬものはあるまい。大阪からは阪鶴線、京都からは山陰線によつて舞鶴へ出、そこから船で宮津までゆけば、橋立までは陸路二十五丁である。また宮津から橋立の南端切戸の文殊まで汽船が出るから便宜乘船すべきである。橋立の案内は道順として、

【切戸の文殊】　から初めなければならない。こゝは眞實の一葦帶水といふべき僅な距離の間、海を隔てゝ、橋立の南端に連なつてゐる所で、もこは久世戸といつて、對岸の橋立とは地續きであつたのだが、海變で土地が切れて橋立から緣を切り離された切戸といふのはその故で、文殊といふのは卽ちこゝにある【文殊閣】を指たのである。文殊閣は山號を天橋山智恩寺といふ。臨濟宗妙心寺派に屬し日本三文殊の一といはれる文殊菩薩を本尊としてゐるのだ。二層の山門があつて上を黃金閣、下を海

上禪叢といふ頗る立派なものである。其他境內には多寶塔、經藏、和泉式部塔などがある。なほ寺の附近には【龍燈松】【式部櫻】【櫻山】なご見るべき所が多い。殊に櫻山は海に臨んだ小丘で橋立の全景を眺望し得るので杖をひく者が多い。

【天の橋立】　文殊から切戸の渡を渡ると、そこからが橋立である。卽ち、與謝郡府中村江尻から、南に向つて宮津灣に突出してゐる長さ二十七丁、幅の廣いところで三十二間といふ長大な沙嘴で、一帶の松林になつてゐる。文殊から渡



天の橋立

を渡つた所に

【天橋神社】がある。磯清水といつて眞水の泉が社の右手にあるので名高い。よつてこの社を磯清水橋立明神ともいふ。橋立神社から北へ二十五丁江尻附近まで、白砂青松一帶の地は現今【橋立公園】になつてゐる。橋立の風光はその松林の中を歩いて見た所で何の變つたものもないつまらない所だ。美しいのはその廣い灣内に橋のやうに長々とかゝつてゐる松林の全景にある。最もよく之を觀るには橋立の北端江尻から、更に十八丁上つて

【成相山】から見降ろさなければならない。殊に橋立は日の出の頃に見るのが最も美しい。太陽が上りきつてしまふと光線の具合で美觀がいくらか減殺されるやうだ

從つて橋立遊覽には前日に文殊まで到着し、その日は附近の名所を見て一泊、夜あけ前に起て成相山まで上らねばならぬ。宿屋に通じて置けば都合のい、時間に文殊

天の橋立

天の橋立

成相山の傘松の邊から股のぞきをして見ると成程天下の奇觀だ、無類の美しさだ。又文珠の櫻山からしてもいゝ。それから雨がいゝ。雪がいゝ。朝霧の次第に晴れて行く際がいゝ。夕靄の裡に漸徐る隱滅して行く時も亦格別な趣がある。

から江尻まで和船をしたてゝくれる。江尻から十八丁登ると成相山の中腹に【傘松】といふ所がある。こゝが卽ち橋立の全景を見るに最も適した所である。こゝから見降ろすと、鏡のやうな宮津灣に弦を張つたやうに一文字に長く連つてゐる橋立の景色は、實際パノラマのやうに見ゐる。殊に『股のぞき』と云つて倒に股の間からのぞくと一層美しいので名高い、傘松から更に登ると【成相寺】に出る。この寺は西國二十八番の靈場で、草創は慶雲元年、今の堂宇は寛永年間の再建に係るものである。こゝから再び江尻に戻つて橋立の松原を徒歩で文珠へ戻つてもよし、又は江尻まで船を雇つたものは待たせて置いて再び船で文珠へ戻るべきである。歩くよりも船で松原の外から見る方が或は興が深いかも知れない。

【宮津附近】 橋立を遊覽するものは序に宮津附近の名勝をも探るべきである。【宮津城趾】は宮津町の中央を貫通してゐる大手川の東にある。宮津の東には【金引の

瀧】がある。高さ八十尺、附近に楓が多いので秋は非常に美しい所だ。また宮津町の南には【智源寺】がある。慶長年間藩主京極氏の建立した寺で、日本三躰の一と稱する一寸八分の黄金佛を本尊に安置してある。

【宮津舞鶴間】　宮津から舞鶴間は前にも記した如く汽船の便があるが、健脚の人は徒歩でゆくのも極めて興がある。この里程約七里、坦々たる道が通つてゐる。この道は海岸に沿ふて絶壁の崖の上についてゐる道で、道中の風光は實に雄大なもので漂渺たる日本海の荒浪を控へ崖にうちよする浪が巖にくだけて數丈の飛沫を飛ばす壯快を見ることが出來る。船でゆくよりも遙かに愉快だ。

【舞鶴附近】　舞鶴に遊ぶものは是非【新舞鶴】に行つて見るべきである。新舞鶴は舞鶴町から東約一里、舞鶴驛から瀛車で十五分でゆける。この地は即ち海軍鎭守府の所在地として名高いことはいふまでもなからう。舊名を餘部といひ、明治二十八

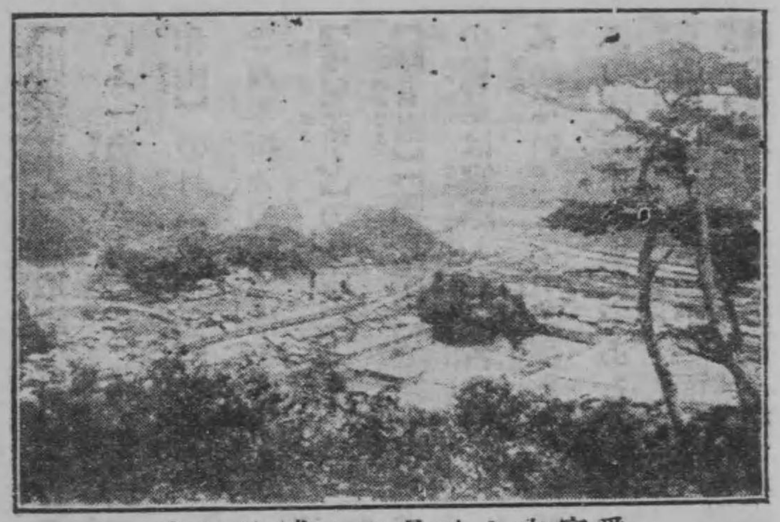
九年の頃までは一漁村に過ぎなかつたのだが、鎭守府が置かれてから忽ち大きな市街となつた。新しい市街である丈けに町並の正しいこと、道路の廣いことは堂々たる大都市も到底及ぶ所でない。こゝの軍港は地形の理想的なること日本一この稱のある位で、海の前面には大きな島があつて港の入口をすつかり蓋をしてしまつてゐるので内部から見ても一体どこから船鑑が外洋へ出られるのか少しもわからない。無論外部からは軍港所在の見當すらつけることが出來ないやうな所だ。

大社詣

緣結で名高い出雲の大社は大社行の山陰線が直通してから非常に便利になつた。京都からは直通の大社行山陰本線により、大阪からは阪鶴線で山陰線へ乘つけば二日の餘裕さへあれば十分往復が出來る。姫路からは播但線がまた山陰線に連絡してゐるが、神戸の人でも神崎驛まで東へ來て阪鶴線にのる方が遙に便利である。大社詣りで少しは時日の餘裕をもつてゐる人は、途中々々の名勝を探りつゝ行のも興が深いであらう。最も細かに見てあるいては限りがないが、左に二三を拾つて見やう

山陰で是非一度は降りて見ねばならぬ所は城の崎であらう。

【城崎温泉】 豐岡川の西岸來日嶽の麓にある温泉で昔から頗る名高いものだ。交通の不便の時代には名の割にはあまり振はなかつたので、物價なども隨分安いので眞の湯治客の間に大に觀迎せられてゐたものだが交通が開けたお蔭で、忽ち非常な發

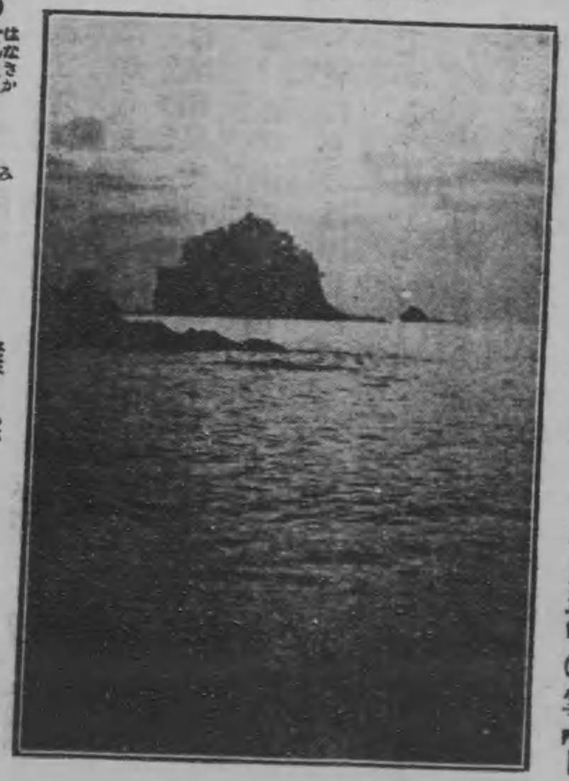


愛宕山より見たる城崎温泉

展をしたと同時に今日ではもうつかりしてゐると丸裸に剝ぎこられさうな形勢だ。最も温泉だから丸裸になつて不思議はないわけだ。泉質は塩類泉で鴻の湯、曼荼羅湯、御所の湯、口の湯、柳の湯地藏の湯等にわかれてゐる。城の崎へ來たものは序に附近の【玄武洞】を見るべきである。町から一里半、田鶴野村大字赤石にある玄武岩の洞窟でその奇觀は昔から名高いものだ。城の崎から鳥取までの間にまだあまり人に知られてゐない非常な絶景の地があるからこゝに紹介して置く。

【田後海岸】 鳥取驛より二つ東の驛、岩美驛で降りて二十丁で海岸に出ると田後といふ一漁村がある。この附近の風光は實に明媚を極めたもので、【桐山城】の雪【日和山】の月【菜種島】の花なご四季折々の眺めはもとより【稚兒落し】の斷崖【千貫松島】【觀音島】【鴨ヶ磯】【城原】等の風景は實際天下の名勝たるに恥ない。この中菜種島といふのは海中の孤島であるが初夏の候になると島中一面に菜種の花がさく。海の眞ん中で菜種の花盛りを見るなごは甚だ珍らしいことで花時分は頗る奇觀を呈する。またこの島の夕照は特に絶景をもつて鳴つてゐる近年この海岸一帶の地を公園すにる計畫があつたが、未だ實現されてゐない。

菜種島の夕照



【岩井温泉】 同じく岩美驛から東北約一里、岩井村にある。泉質は鹽類泉で、リウマチス、慢性胃加答兒等に効があるので附近では名高い温泉になつてゐるが、まだ廣くは世に知られてゐない。

【鳥取市】 山陰有數の大都會で、鳥取縣廳の所在地である。池田家三十二萬五千石の舊城下で、昔から山陰道交通の衝にあたつてゐたが、山陰線開通以來更に商工業の發展を來した。市中で見るべき所は、【鳥取城址】【樗谿神社】【扇邸】等の外市内吉方村には【吉方温泉】がある。明治三十七年に發見せられた鹽類泉だ。また市内栗谷町の【興禪寺】の境内に伊賀越の仇討で名高い【渡邊數馬の墓】【荒木又右衛門の墓】がある。市外では鳥取より一里十丁、岩美郡宇部野村大字宮下に武内宿禰

を祀つた【宇部神社】附近に在原行平が『立ちわかれ因幡の山の峰におふる』の歌をよんだ【因幡山】がある。また同村大字岡益村には【安德天皇陵參考地】がある。源平合戰の時に西海で海に入り給ふた安德天皇は、實はこの地に遁れ給ふて崩御になつたと傳へてゐる。今宮内省で御陵參考地にしてゐる。

【米子町】　夜見半島の頸部にある町で、山陰全道水陸交通網の中心地となつてゐる重要な町である。町で見るべき所は【米子城趾】位のものだ。城址は眺望の頗るいゝ所で、麓に【錦光園】と名づけた公園がある。米子へ來たものはぜひ足をのばして【夜見ヶ濱】を見るべきであらう。米子町の北、日野川河口の北西に幅一里長さ五里に渉つて突出してゐる夜見半島の海岸一帶を總稱して夜見ヶ濱といつてゐるので、白砂青松の風景恰も天の橋立を大きくしたやうな所で、世に【大天橋】と呼ばれてゐる。從つて橋立と同じく長い汀を歩くよりも、對岸の島根半島の鷹尾山に上つて夜見ヶ濱の全景を鳥瞰する方が一層美しい。その狀は天の橋立よりも數倍の大きさをもつてゐるだけに非常に雄渾壯大な感じを與へる。夜見ヶ濱の北端には【境港】がある。浦塩、朝鮮等その貿易移出入の要港で、將來益々有望な所だ。米子から境まで夜見半島を鐵道が縱貫してゐる。

【松江市】　宍道湖と中海との中間、大橋川に跨つた市街で、島根縣廳の所在地である。大橋川兩岸の市街は長さ百聞餘の【大橋】で連絡してある。橋の上の眺望は頗る美しいもので、東に聳ゆる伯耆の【大山】の兀突たるを背景として西に渺々と開いてゐる宍道湖の鏡のやうな水面に市の影を映してゐる狀は全く繪のやうな所だ。

【松江城趾】は今公園に開放されてある。その他宍道湖に臨んだ【天神公園】【袖師浦】【嫁島】等附近に見るべき所が多い。殊に嫁島は宍道湖の一孤島で、納涼の名所で、風景の美は出雲風土記にも見ゆ、古から名高いものであつた。この地の產

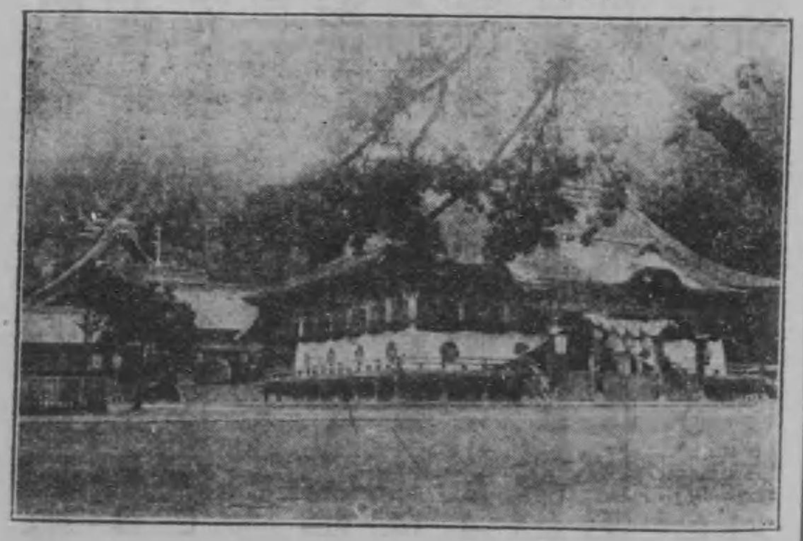
物で八雲塗漆器、出雲燒陶器、瑠璃細工は天下に名を得てゐる。

【杵築町】　この項の題目である【出雲大社】の所在地である。この町は全く出雲大社參拜客のために出來てゐる町といつて差支ないので、街もあまり立派ではなく杵築灣も浪があらくて船の繫留に不便であるし、從つて商業などはこの町よりも約三里隔てた今市町の方がよく發達してゐる。然し唯出雲大社のみは、伊勢神宮に次いで世に誰知らぬものもない社で、これあるがために杵築町は永久の生命を得てゐるといつていゝだらう。

【出雲大社】　杵築町を過ぎて大華鳥から坂を下ると【祓橋】といふのがあつて、そこから大社の馬場になつてゐる。やがて毛利綱廣の寄附した銅の華居があつて、それを潜ると大社がある。正面に拜殿、左に社務所、右に會所の建物がある。何れも壯麗なものだ。拜殿の後に八足門があつて、その奥に本殿がある。大國主命を祀た

官幣大社であることはこゝに今更記す要もなからう。この社殿の高大なことは則ち大社の名が起つた所以なので、（世に大社といつてゐるのは官幣大社の大社といふ意味でなくて社殿が大きいので昔から大社と言ひ慣はされたものだ）構造の樣式は全く我國古代の宮殿建築の樣式を襲用したもので、垂仁天皇この社を皇居に模して建築をなさしめ給ふたのが始まりであるといふ。本社の高さ八丈。床の高さ一丈二尺、入口の扉が中央になくして右の方に偏してゐる。これは大國主命時代の

出雲大社正殿及拜殿



遺風であるといふ。この社の草創は、天照大御神、武雷命、經津主命の兩神に命じて中國を平定せしめ給ふた時、當時既に中國に據り治めてゐた大國主命は國をあげて皇軍に献じた。大御神大に之を嘉したまふて宮を多藝志小濱に築いて天穗日命及びその子孫をして祭事を掌らしめ給ふた。これ卽ち今の大社で、同社の宮司千家、北島の兩家は、天穗日命の後裔である。天穗日命時代の社殿は今よりも更に宏大なもので、三十二丈造りと稱せられたもので、垂仁帝の時に皇居に倣ふて十六丈造りと定め給ひ、又假殿を築いて之を八丈造りと稱せられた、今の社殿は卽ち八丈造りのそれである。中世大に衰微して祭典も廢れ時には神佛合体の社になつたこともある。毛利元就がこの地を領して以來前次恢役せられたが豐臣秀吉の時に又社領を削減せられた、德川時代に入つて再び恢復の運に向ひ、明治七年に至つて更に新じく造營せられたが今の社殿である。かくの如く社運には多少

の波瀾を免れなかつたが、世の尊崇は古來少しも斷續することなく、殊に後世この神を緣結びの神といふことになつてから、一般世俗から馬鹿に尊崇されるやうになつた。ごういふ所から大社が緣結びの神になつたかといふと、これはまた頗る馬鹿々々しいものだ。昔京の出雲路に幸神といふ神社があつたが、これは生殖の神で、所謂緣結びの神、特にその祭つた所の名前を冠して出雲の緣結神さまといふので名を得た、それがいつのまにか、眞實の出雲の國の大社と結ついて大國主命がひごく粹な神樣になつてしまつたのである。尤も實の所をいふと大國主命といふのは古事記や何かで見ると大分浮氣な神樣で、女で浮名を流してゐられる。先づ命の兄弟の神達が稻羽の八上比賣を得んとて稻羽の國に赴かれし時、命もこれに供して行かれたが、八上比賣は大國主命の優しい所に打ちこんで他の兄弟の神達のいふ事をきかないで遂に命と婚した。所で命はまた一方で、須勢理比賣といふ嫡妻を

得られた。須勢理比賣といふのは中々嫉妬深い性質でさすがの命も大に怖れて居られた。八上比賣と婚しても人知れず他に圍つて置かれたがさうかと思ふとまた一方で高志の國の沼河比賣といふのと婚せられた。かういふ風であつたから須勢理比賣の嫉妬はます〳〵激しくなつて、遂に命は出雲から倭の國に逃げてゆかれやうとしたことがある。この出發の時命が馬の鞍に左手を置き、片足を鐙にかけて須勢理比賣と應答したまふた歌が名高いもので、殊に須勢理比賣の歌は、單に嫉妬といふやうな感情的なものではなく、古代日本婦人の貞操觀を窺ふに足るものとして尊重すべきものだ。その歌を掲げてもいゝが古語で讀者に解しにくいかも知れぬから略して置く。唯その意味は、『貴郎は男であるから、どこの海の果、磯のさきにゆかれても、ゆく所〳〵で妻をお持ちになることが出來やうが、妾は女であるから貴郎をおきて外には男はありませぬ、夫はありませぬ。どうか遠くへ行かずに酒でも召し

あがつて寢んで下さい』といふ意味の極めて優しいものだこれによつて命と比賣の爭ひ和ぎて再び仲よく鎭まりましたといふ。然し大國主の浮氣は依然たるもので、その後胸形奥津の宮でまた多紀理比賣といふのを娶り、また神谷楯比賣を娶つた。また三輪傳說に玉依姬に大物主の神が通つて子をうませたことが出てゐる。（日がへりの旅路櫻井線三輪驛の條參照）大物主は卽ち大國主のことである。（以上何れも古事記所載の傳說に從ふ）かう書いてくると、成る程出雲の大社が緣結びに無關係だとはいへなくなるが、但大國主命にあやかつて、浮氣の仕放題といふ緣結びではちと怖れ入る。尤も命の浮氣は、當代一夫多妻の習俗に從つたまでゞ、今でいふやうな放縱だの無節操だのといふやうなものではなかつた。その時代にあつてなほあの須勢理比賣が『妾は女であるから貴郎をおきて外に男はありませぬ、夫はありませぬ』と歌つて酒をすゝめて命をなだめた纏綿たる情緒は現代の山の神たるもの

以て大に學ぶべき所だらう。

緣結びの話から大分横道へそれたが、もこへ戻つて前にのべた大社の八足門の左右は廻廊になつてゐて樓門がある。これに葡萄こ栗鼠の精巧な彫刻を施してある。左甚五郎の作だこ傳へてゐる。樓門の右に【觀祭樓】こいふのに大社の寶物を藏してゐる。古くから朝野の尊崇篤かつた社であるだけに寶物の數も頗る多い。中にも後醍醐天皇の琵琶足利義滿の甲冑、豐臣秀吉の太刀等は皆國寶になつてゐる。寶物は毎年三月一日の大祭、四月九日の教會衆等に信徒に縱覽を許される。境内に攝社末社頗る多いが、別に祭神のない十九の社殿が建つてある。これは俗に毎年十月には諸國の神が出雲の大社へ參集するこいふが、その時の神樣の宿に建てゝあるものだこいふ。用意周到こ申すべしだ。大社へ詣でた者は、附近【稻佐海岸】を觀るべきである。風光頗る明媚、殊に夕日の景が美しいので名高い。

大峰登山及十津川附近

行者詣りで名高い大峰山は吉野の東南にある標高五千七百五十尺の峻山で、一に山上嶽こいふ。頂上に【大峰山本堂】がある。左にその案内を述べやう。

登山道は【吉野水分神社】（吉野鐵道吉野の條參照）からするので、約二十丁登つた處に【愛染堂】がある。そこから上は、眞に山嶽重疊たる深山で、【小天井】【大天井】等の嶮がある。そこからいよ〳〵峻嶮な道を辿つて四十丁ゆくこ【洞辻】に出る。こゝは洞川からの登山道こ合する所で、そこから山の頂上まで十數丁であるこの邊から山の情景が全く一變して、今まで道で見たやうな大樹老木は全くなくなつて背の低い雜木ばかりになつてゐる。その代りに至る所奇巖怪石錯雜して頗る奇景に富んでゐる。洞辻から頂上までの間に【大鞍掛】【小鞍掛】の坂があつて、そこを越へるこ【鐘掛岩】こいふのがある。數十丈の恐ろしいやうな大巖で、この上へ

大峯山本堂

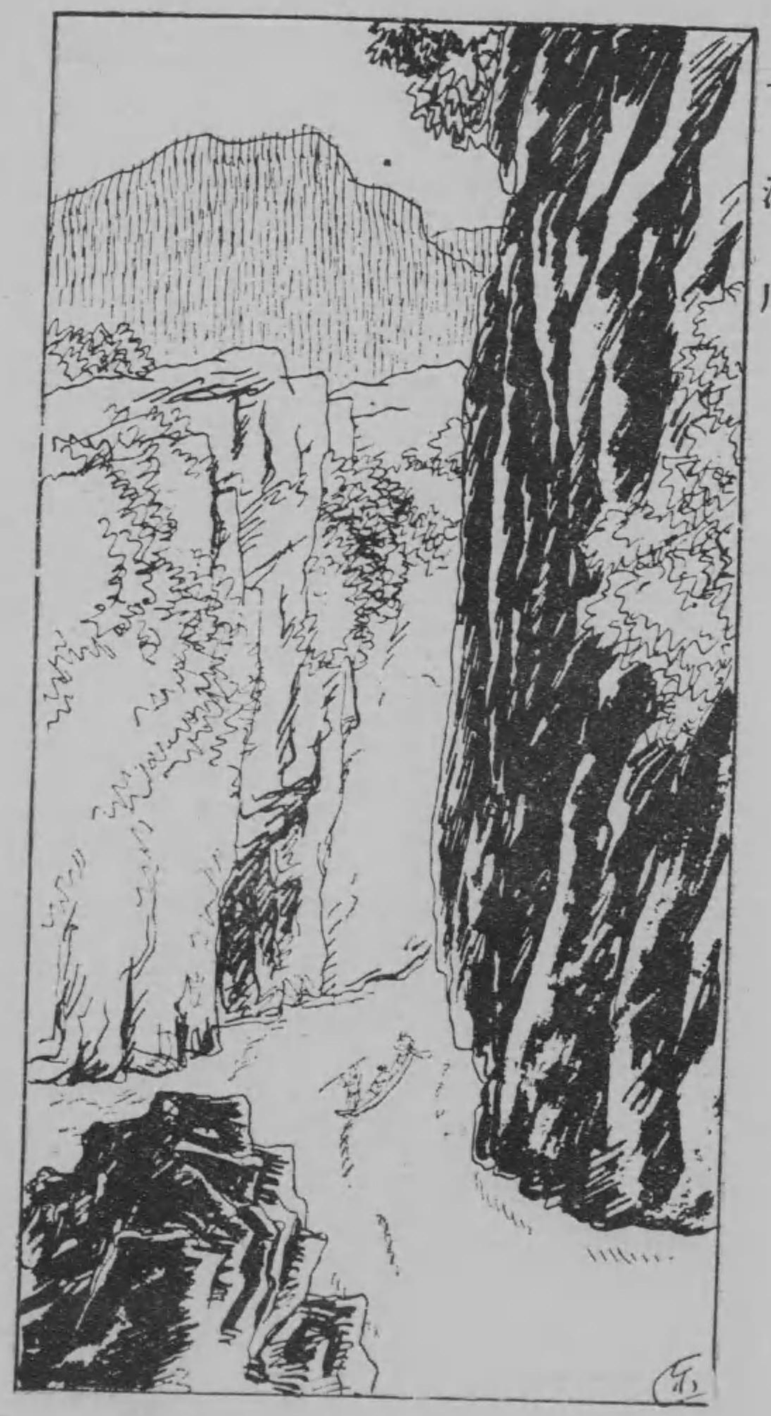
上るこ大和から山城の山野がパノラマの様に脚下にあつまつてゐるのが見ゐる。鐘掛岩から上に【西覗岩】がある。これも數十丈の危巖で、岩面に不動の像が彫つてある。そこを過ぎると卽ち【大峰山本堂】である。この地は卽ち役小角修行の地で巍然たる堂宇に藏王權現を本尊こし、役小角自作こ稱する像を安置してある。山頂の眺望は壯大を極めたものでよく晴れた日には富士山が見ゐるさうである。本堂から少しゆくこ裏行道こいつて奇巖巨石峙立し峻嶮奇怪を極めた所で、【湧出石】

【蟻戸渡】【飛石】【東覗岩】【行者岩】【屏風岩】等がある。そこから更に三里下つて【洞川】へ出るのが順序である。洞川は卽ち山上嶽の西麓、天野川の溪谷にある戸數三四百の村で、【龍泉寺】【蟷螂岩】なご見るべき所がある。

大峯山行塲不動登岩

洞川から道を西北に山越ゐに吉野郡の下市又は宇智郡の五條に出てもよし、更に時日に餘裕のあるものは天野川を舟で南に十里下つて【十津川】に出るのも興がある。この間何れも山間の僻地で、名所こいふやうな所こて別にあるわけではないが、ゆくくゝ谿谷の風景頗

る奇勝に富んでゐる。【十津川村】は天野川の下流なる十津川に臨んで數里に亘つて連つてゐる村落の總稱で、この地は古から一種の別天地を作り、南朝の遺臣なご多くこの地にかくれた。從つて昔はこの地の人間は樵夫野人に至るまで士分の者が多く、『大和十津川の鄕士』といへば、自ら他と異つた氣風をもつてゐるので天下に鳴らしてゐたものだ。今にこんな僻地であるが文武館なごいふ中學組織の私塾があつて鄕士の子弟に特別な敎育を施してゐる。この地で【十津川の針金橋】といふのが名高い。十津川に沿ふて更に南に下り、【玉置山】附近に來ると【東泉寺温泉】【新湯】【柳本湯】等の温泉が湧出してゐる。交通が不便であまり世に知られてゐない温泉だが、東泉寺温泉は硫黄性、他は炭酸性で温度の如きも百數十度の熱いものが湧いてゐる。またこの附近は元弘の亂に大塔の宮が御艱難あつた舊蹟である。こゝから更に南すると紀州の本宮を經て新宮に出る。又道を東南にとつて玉置



十津川

山を越へて三重縣この境を流れる北山川の方へ出るこ【瀞八町】の勝がある。本宮及び新宮附近並に瀞八町のことは別項紀州海岸めぐりの條參照

十津川下り

地圖で見ても判るがこの川位兩岸の出入りの激しいのはたんとない。譬へを借りていへば將に嚙み合はされむとしてゐる犬の牙のやうである。その間々には大小幾個とも知れない暗礁があり、處々には底が洞になつて大きな渦が卷いてゐる。鯉の銚子、上の瀧門、下の龍門、湯泉寺の細りなどいふ幾多の難所があつて、或處は川全部が瀧落しになつて居り、又或處は小山のやうな涙が不斷に立騒いでゐる。奔雷の勢をもつてまるで岩壁を突き開いて行くやうに落ち沸る上を、右へ外し左へ避け或は獨樂のやうに廻轉して舟をやる壯快さは富士川や保津川の比ではない。が船は特別に交渉しなければ出さない。下るのは十津川中何處からでもよい。終點は平谷といつて、そこからは新宮迄通ひ船がある。（十津川へ這入るのは吉野からでも高野からでも路はあるが、普通大和の五條からする。辻堂、上野地、折立などゝいふのが途中重な部落である）十津川一村で南北十三里東西七里といふから村としてはまア日本一であらう。

大臺ヶ原登山

大臺ヶ原の峻嶮は世に所謂『大和アルプス』の名で隨分聞いてゐるが果して如何なる所であるかは、實の處未だ世に知つたものは少い。大和アルプスといつても大臺ヶ原は大和一國にあるのではない。卽ち大和の吉野郡から伊勢の多氣郡、紀伊の北牟婁郡及び南牟婁郡に跨つた山嶽重疊の一大深山で、道は吉野の奥の宮瀧(下市の上流、吉野鐵道吉野の條參照)から紀伊の引本(紀伊海岸巡り引本町の條參照)へ十數里の道が通つてある。然し敢てそれも縱斷するこか橫斷するこかいへるやうなものではない。單に人間が通つた歷史が記錄されてあるこいふに過ぎない。大部分は茫々たる臺地こ物凄い深林で、殆ご全く人跡未到の地である。かういふ所であるから登山を試みんこするものは先づ十分な食糧こ寢具、磁石その他旅行こいふよりも探險に必要なものを豫め用意してゆかねばならぬ。往々世の無責任な案內記や、知ら

ぬ人の言葉を信じて輕卒に登山した爲めに生命を落したものが隨分あるから旅行者は始めからその積りでゆかねばならぬ。大和の方からする登山道は前記宮瀧から東南に、川上村大瀧を經て同村入之波に出る。大瀧附近は石灰岩洞が多いので頗る奇景に富んでゐる。入之波まで約七里ある。入之波には【入之波溫泉】近傍に【菊の平溫泉】がある。そこから大臺ヶ原に入るのである。山間は約六里こいふが道こいふやうな道ではないから、うつかりするこ奥深く迷ひこむから用心しなくてはならぬ。山中で世に知られてゐる勝地は、東の瀧、中の瀧、西の瀧等の瀑布大蛇ヶ倉の谷等があるが、その外至る所奇勝こ云へば奇勝、凄いこ云へば凄い無名の谷や流れが數多くある。中には、德川時代に德庵こいふ醫者が幕府の命によつて藥草採集にこの山に入り、過つて水に落ちて死んだこいふので德庵流れなごこ名のついたものもある。森林帶へ入るこ、實際地球が出來て以來未だ一本の斧も入れたここのない物

凄い大深林になつてゐる。一体この道は維新前に和歌山藩士が探險をやつたのが始めで、それも到底十分にはゆかなかつた。明治になつてから松浦某といふものが、大臺ヶ原の森林に目をつけて開托を謀つたが、それも遂に成功しなかつた。近年漸くこの山の紀伊國の部分に約五里に亘る御料林の經營が成つたので漸く大和と紀伊を連絡する道が開けたのだが、前にも言つた通りそれも極めて不完全なものであるから更にくはしくは有志の探險に依賴せねばならない。

さて、道が紀伊に入り五里の間御料林となつてゐる所を過ぎると、北牟婁郡の船津村に出る。そこから引本町まで約四里である。

紀州海岸巡り

紀州は人も知る如く陸路の交通甚だ不便な所で、主として汽船の便によらなければならぬ、また人文の發達も重に海岸地方にのみ偏してゐるやうで、從つて見るべき所も多いので特にこの稿を設けた。但し海岸巡りといつたからとて必ずしも海岸だけに局現するわけではない。交通の便宜上海岸から說いて奥深く記事を進めてゆく事もある。その點は讀者も諒とせらるゝであらう。また【和歌山市】【和歌浦】附近の名勝は既に『日がへりの旅路』の中で詳述したからこゝには略する。本項は和歌山から汽船で出發して先づ

【塩津浦】に上陸した所から說き起さう。こゝは和歌浦から僅かに四海里に過ぎない所で、附近海岸の風光の明媚なことば和歌浦にも劣らぬ勝地である。塩津から西南約一里、濱中村字上村に【長保寺】がある。一條天皇の長保年間に創建せられ慈覺

大師の法孫二品親王沙彌性空大和尚を開基としてゐる名刹である。德川頼宣以下紀州候累世の墓所があるので名高い寺だ。附近の風光甚だ幽雅な所で櫻なども多い。

【大崎港】 下津浦に臨んだ港で、この附近海岸の風光また頗る見るべきものがある殊にその西方の沖にある【浦初島】の風景は到底内海では見ることの出來ない趣をそなへてゐる。初島は二つの島に分れてゐるので、東にあるを【地の島】西にあるのが【沖の島】と呼ばれてゐる。地の島は周圍三十一町、南北に長い島で、鬱蒼たる松がその上に生へてゐる。沖の島の方は少し小さく周圍二十一町、これは東西に長い島だ。沖の島には樹木がなく篠だの茅が繁茂してゐるだけである。兩島とも巖石稜々としてそばだち、太平洋の大浪がその根に碎け散つてゐる風景は實に雄大を極めたものだ。就中沖の島の東端にある巖石は庭石として甚だ賞美せられる所で和歌山へ多量に輸送される。

紀の海や沖のなみまの雲はれて、雲にのこれる浦の初島　　新續古今集

【箕島】 有田川が紀伊海峽に注ぐ川口北岸にある港で、有田郡物産の輸出港として重要な地である。天下に名高い紀州密柑は、この有田川沿岸の地方から產出するので、何れも皆有田川を船で箕島に輸送し箕島から諸國に散ぜられるのである。また【有田川】の上流は頗る奇景に富んだ所で、川口から凡そ五里松原村附近には數丈の巨巖屹立して兩岸相迫り水勢轟々として瀑布をなし激突狂奔する樣は實に偉觀である。この瀑布をなしてゐる處を【鮎瀧】と稱してゐる。こゝから上流はかういふ奇勝が甚だ多いが交通が不便であるためにあまり世に知られてゐない。

【湯淺町】 廣灣に臨んだ港で、有田郡第一の都會である。こゝの產物で醬油が世に名高い。【湯淺城趾】【深專寺】【滿願寺趾】等見るべき名刹舊蹟がある。町の西北海岸は白亞紀化石が多く出るので地質學上甚だ名高い所だ。また町から西北一里半

保田村字千田に【須佐神社】がある、素盞嗚尊を祀つた社で、和銅六年の創建と傳へられる古社である。この社から東北數丁に中將姫の淨瑠璃で名高い【雲雀山得生寺】がある。中將姫が家人春時に扶けられて住んでゐた所を寺にしたと傳へ、寺内に姫の像と春時夫婦の像を安置してある。尤も今の堂は寛文五年穢空上人が再建した所といふ。左に中將姫の實説と傳へてゐるものを紹介して置かう。中將姫は藤原豐成の娘で、聖武天皇の天平十九年八月十八日をもつて生れた。幼くして母を失ふたが箏に非常な天才をもつてゐた。九歳の時に禁中に召され箏を奏したが、天皇大にその妙を賞したまふたので繼母の照日といふものがひどく姫を憎んでゐた。十二三歳の頃にまた禁中に召されて箏を奏したが、その技いよ〳〵熟して以前に倍する妙技を發揮したので、天皇大に感じ給ひ三位に叙し中將の名を賜ふた。繼母はいよ〳〵これを妬み、遂に姫を害せんとて、家人春時といふものに命じて紀州の雲雀

山の山中に誘ひ行き之を殺さしめたが、春時姫の罪なきを悲しみ、姫を助け雲雀山の下に草庵を結んでこれに庇護つた。これが卽ち得生寺のある所だといふ。後豐成この地に狩をした時たま〳〵山中で姫に會ひ、遂に之を伴ひ歸つた。間もなく繼母は病を得て死んでしまつた。姫は、わが命を保つことを得たるは偏に佛の力であるとなし、二十四歳の時當麻寺に入つて尼となり善心尼と稱した。こゝで五色の蓮糸をもつて曼荼羅布を織らしめたと世に傳へてゐるのが、現存當麻寺の名高い曼荼羅である。天應元年三月十四日姫は三十五歳にして死んだ。

【由良港】 由良灣の南緣に位する港で、灣口には蟻島、煙島、鹿尾菜島などの小島が碁布し、その間に漂渺たる太平洋が果もなく水や空に連つてゐる風光は實に絶佳である。この附近は古から『玉ひらふ由良のみなと』などいつて歌枕の名所になつてゐる。

妹がため玉を拾ひて木の國のゆらのみさきにこの日くらしつ　萬葉集

玉ひらふ由良の湊にてる月の、光よそへてよする白なみ　平重晴

【興國寺】　由良港から東北二十四丁、由良村大字門前にある臨濟宗の寺だ。堀河天皇の安貞元年、法燈國師が開基したといふ名刹で、寺域一萬五千坪地藏堂、開山堂、鐘樓法藏、大門など堂々たる伽藍をもつてゐる。尤も最初の堂宇は天正の兵亂に燒け現在のものは淺野長政が紀州に封ぜられた時再建したものである。興國寺から西北に十八丁の山路を辿ると衣奈村に【衣奈八幡宮】がある。日本書紀によると、神功皇后三韓から御凱陣の時、忍熊王兵を起して皇后を討たんと待ちかまへてゐたので皇后は武内宿禰に命じて皇子(應神天皇)を懷にして南海を横ぎつて紀伊に赴かしめられた。後皇后も亦紀伊にまゐられ日高で皇子にあはれたと見ゐてゐるが、卽ちこの地は宿禰が皇子を懷にして來り暫く居つた處で、里人その遺趾に神殿を營んだのを後に八幡宮と崇めたのが現在の衣奈八幡宮であると傳へてゐる。

【日井岬】　由良から船が南方に向つて進むと、左の方に高い燈臺を見るであらう。そこが卽ち日井岬である。この附近は紀伊海峽が漸次太平洋に開いてゐる所で波のうねりはだん〳〵大きくなる往々船客がなやむ所だ。岬の燈臺は水面上二百六十呎、回轉式で、その光二十海里に達する立派なものである。

【御坊町】　日高川の河口にある町で、熊野街道の名邑である。湯川直光の創めた日高御坊と稱する本願寺の大伽藍があるので名高い。【日高川】は、日高郡の東の隅龍神村の山中から發して蜿蜒四十八里を流れて太平洋に注いでゐる大川で、下流七里の間だけ舟が通るがそれから上流は奔流急湍で、筏すら下すことの出來ない所がある。それだけまた風景甚だ奇絕で、【日高川五瀧】といふ名高い激湍がある。卽ち檜皮瀧、鳴瀧、手早瀧、大瀧、黑島瀧の五で、何れも川の瀨に激しい高低がある

ために瀧の如く水が流れ落ちてゐる所だ。中にも手早瀧はよほど熟練したものでなければ筏を流すことが出來ない、大瀧に至つては全然通れないので、傍の巖に穴をあけて漸く通つてゐる、頗る奇觀だ。

【道成寺】 安珍清姫の話で名高い道成寺は御坊町から東北三十丁、矢田村大字土生にある。天臺宗で、文武天皇の大寶元年勅によつて義淵僧正の開基する所である。本堂は極めて古いもので屋根の瓦に天授二年季春一方修覆、大檀那吉田藏人源頼秀六男源金比羅丸と銘してある。その他、三重塔、護摩堂、念佛堂、釋迦堂、十王堂等があるがこれは何れも元祿時代の建築である。本尊は千手觀音、本堂の傍に【入相櫻】がある。また塔のそばに【安珍の塚】がある。境外の田の中に【清姫の塚】がある。

【印南町】 御坊から南約三里、海に臨んだ小驛である。附近の切目村に【切目王子

神社】がある。崇神天皇の朝創建の古社、天照大御神以下六神を合祀した社である。古來熊野詣りには先づこの社に詣でて神木の棚の葉をかざしにして神符とした もので、切目の玉子の棚の葉といへば保元物語、平家物語等にも見えてゐる名高いものだ。太平記に護良親王熊野落ちの時にこの社の神託によつて十津川へ落ちたまふたことが書いてある。切目神社から一里半、熊野街道の岩代村の路の傍に【結松】といふ老松がある。孝德天皇の皇子有馬皇子、御謀叛の由大臣蘇我赤兄に讒せられて捕はれ給ひ、折から牟婁の溫泉に行幸中の齊明天皇の許に送られて誅はされ給ふた。その送られたまふ途次この松を過させたまふて松が枝をひき結び『磐しろの濱松が枝をひき結び、まさきくあらばまたかへり見む』とよませ給ふたといふのがこの松の緣起である。松が枝を結ぶのは命の長久を祈る古代の風俗であつた。それから後この結びの松は屢皇子を傷んだ歌によまれてある。

後みむさ君が結べる盤代の、子松がうれをまた見けむかも　萬葉集

年を經てまたあひ見ける契をも、結びやおきし盤代の松　新勅撰

たのみこししるしもいかゞ盤代の、野中の松にむすぶ恨を　後鳥羽院御製

【千里濱】 岩代村の濱つゞきで、南部村山内の海濱一帶の稱である。花山院出家あり て熊野詣の節この濱で病に罹らせられた。大鏡に『熊野の道に千里の濱といふ所にて御こゝちそこなはせ給へれば、濱つらに石のあるを御枕に御寢りたるにいと近くあまの塩やく煙たちのぼる心細さいかにあはれに思されけんな』とある。いかに御出家御修行の道とはいひながら嘗ては萬乘の御身にしてかくの如き御有樣は畏き極みである。元來花山院の御出家は御本意ではなかつたので、當時右大臣藤原兼家、我外孫たる一條天皇を一日も早く御位に卽け奉りたさに、花山院の休所弘徽殿の女御卒去ありて院の御悲嘆深かりしに乘じて巧に誑り奉り、出家をせ

させ奉つたのである。鸚鵡に涅槃經の文句を覺へさせ御前近く放つて天皇の御菩提心を嗾り奉つたり扇子に經文を書いて故意に御前に置き忘れ御下問にあふて無常の道を說き奉つたりなごした術策至らざるなき畏き話があるが長くなるから略しておく。

末遠き千里の濱に日はくれて、秋風おくる岩しろの松　夫木集

【田邊町】 田邊灣に臨んだ和歌山縣中でも有數の大都會である。昔は熊野參詣の要衝で名高い町であつた。今でも尙ほ水陸交通の要路に當つて頗る殷盛である。物產には晒葛粉、塩辛等が名がある。附近に【田邊城趾】【鬪鷄神社】【海藏寺】なご見るべき所がある。中にも鬪鷄神社は熊野の別當湛快が熊野神社をこゝに勸請し新熊野と稱せられた社で、湛快の子湛增の時、源頼朝伊豆に兵をあげ湛增に味方をすゝめたが、湛增去就に迷ひ、赤白の鷄各々七羽を鬪はし、白鷄の勝に歸したので遂

に源氏に味方した、これから鬪鷄神社の名が起つたといふ。

【湯崎温泉】 田邊町の南方、海に臨んで突出した岬の一角にある温泉で、日本書紀に『紀の温湯』と見えてゐるのがそれである。齊明天皇、天智天皇、持統天皇、文武天皇等の行幸があつた古い温泉である。泉質は炭酸性で、崎の湯、濱の湯、元の湯、屋形の湯、礦湯、疝氣の湯、粟湯、目洗湯の八湯にわかれてゐる。また附近の風光は渺々たる太平洋に臨んだ絶佳の地であるので浴客が多い。田邊町から毎日渡船の便がある。温泉の東に【瀬戸の鉛山】がある。昔こゝから鉛が出たので鉛山の名がある。今は廢鑛になつてゐるが舊坑は今に存してゐる。温泉からこの鉛山に至る海濱を【白良の濱】といつて風光最も勝れた所で、第三紀砂岩が風化作用と浪の浸蝕作用で雪のやうな眞つ白な砂になつてゐる。何れも卽ち石英砂であるから硝子の原料に採集せられてゐる。『沙歩鎔銀を踏み、空に接して雪白を積む、寒光遠く眸を打ち、玉屑深さ千尺、恍惚壺中の天、皓然俗跡無し』なぞいつた詩がある。

たしかに實景だ。

涙よするしらゝの濱のからす貝、ひろひやすくもおもほゆるかな　山家集

いく夜寢ぬしら玉よするましらゝの、濱松が根に松葉折しき　夫木集

【日置】 日置川の河口にある小良港である。【日置川】の上流は風景極めて奇絶の所で激流巖をかむ奔湍の瀑布をなしてゐる所が數個所ある。中にも名のあるは、上流熊谷附近、高さ百間幅二間の【百間瀧】である百間瀧から一里下流に【雨乞瀧】がある。更に下つて古屋谷は盆石の産地として名高いもので、この附近の川中から出る石はごんな小さなものでも皆種々な面白い山水の趣を具へてゐるといふので夙に世にもてはやされてゐる。日置から約一里南に【周參見村】がある。更に南する【二色港】がある。何れも汽船の寄泊地で海運の便が多い。殊に二色港は一に囊

港こもいつて灣が囊のやうに深く陸地に入りこんでゐるので風波の暴い時の避難港として重要な港になつてゐる。

【潮の岬】 二色港の南に二里の長さに亘つて海中に突出してゐる岬で、紀伊の國の最南端にあたつてゐる。潮の岬から東がいはゆる鯨汐ふく熊野浦で、潮流はげしく波の暴いので名高い所だ。附近の風光は實に壯大を極めたもので、澎湃たる怒濤雲に入るの趣がある。廣瀬旭莊の詩に

『濤頭起立して雲間に入る。青山を見ず雪山を見ず。これ是れ蜻蜓洲盡くる所。漁舟一々天を破つて還る』

岬の南端に燈臺の設備がある。また岬の東北方には【串本町】がある。

【大島】 串本町と海を隔てゝ相對した島で、紀伊最大の島である。周圍四里餘、大島、須江、樫野の三浦に分けてある。この中樫野浦は明治二十三年に土耳古の軍艦

が海難に遭つて沈沒した所で、今島中に遭難者の遺骸を葬つた墓及び德川茂承の題額した遭難碑が建つてある。また串本と大島との間に【橋杭岩】の奇勝がある。三十餘の屏風のやうな奇巖がすく〳〵と海中に峙つてあるので實に奇觀を極めてゐる。

【古座町】 古座川の河口にある小都會であるが、熊野浦の漁業の中心地、殊に捕鯨業の根據地として名高い。また【古座川】は頗る奇勝に富んだ川で、古座町から四里上流にある【藍瀬の一枚岩】が世に名高い。これは高さ百七十五間、幅二

熊野百景瀞八丁

百六十間といふ異常な岩で、しかもこれが一枚の巖で出きてゐる。その色宛も鐵のごとく、岩の破目に蔦蘿がはひ上つてゐる外に苔一つ着いてゐない、全く鐵壁の感のする巖だ。俗稱を一枚岩といふが、齋藤拙堂が齊雲巖といふ名をつけてゐる。

【勝浦港】 勝浦灣に臨んだ港で、和歌山から伊勢方面にゆく航海の一要港になつてゐる。名高い【那智山】【熊野詣】はこゝから上陸すべきである。また勝浦から新宮へ【新宮鐵道】が通じてゐる。那智山にゆくには同鐵道那智驛下車、そこから五十丁である。

【那智山】 那智山といへば西國第一番の札所として觀音講のチンカンでお馴染だから、知らぬものは寺だと思つてゐるかも知らないが、ほんとうは【夫須美神社】といふ神樣だ。唯然し本地垂迹の說で權現となつてゐるから神佛合体、神社の傍に【青岸渡寺】即ち那智山觀音堂があつて之が西國一番の札所なのである。夫須美

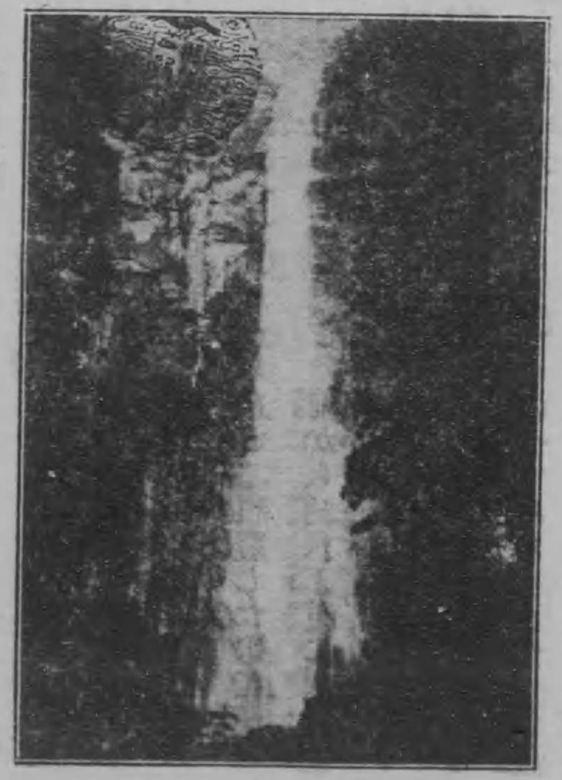
神社は熊野夫須美大神、伊邪那美尊、事解男尊の三神を祀つた社で、大華表、勅額門西御門等をすぎて神苑内に入ると十三の神殿三方に並び鎭座し、實に壯麗を極めたものである。むかしから代々の天皇の行幸あつたことは史上にも名高く將軍諸侯の崇敬は勿論世に熊野詣りと稱して一般庶民の間にも尊崇されてゐた事はこゝにいふまでもなからう。今に桓武天皇の勅額が存してゐて、『日本第一大靈驗所、根本熊野三所權現』と銘してある神社は仁德天皇の朝勅によつて創建せられた

那智山熊野夫須美神社

ものであるといふ。創建當時は權現といふやうな神佛合体のものではなくて純粋の神様であつたらう。が後に佛教が我國に輸入せられて、天照大神は大日如來の化身卽ち權現だなどゝいふ、例の本地垂迹說が盛んになつてから、この神様も佛様と因縁をつけられて權現になつたわけだ。青岸渡寺、卽ち那智山觀音堂は神社の傍にある。これも仁德天皇の朝裸形上人の開基で、推古天皇の朝勅願によつて伽藍を建立したと傳へてゐるが、仁德天皇の朝には本地垂迹はおろか、佛教もまだ渡來してゐなかつた時代だからこの緣起は抹殺だ。本尊は長一丈の如意輪觀世音、本堂は十三間四面、屋根は栩葺き破風作りの御殿建てゞある。天正十八年豐臣秀吉が建立せしめたものといふ。世に名高い【那智瀧】はこゝから約六丁奥の龍紋岩の絕壁にかゝつてある。直下約八十餘丈、日本第一の瀑布として傳へられてゐるが、實はそれ程のものではない。一体この瀧は昔からひどく買ひかぶられてゐたもので、世に名

高かつた丈けに大きな期待をもつて行つて馬鹿を見たものが隨分ある。橘南谿の西遊記にも『この瀧のことは幼き時よりきゝて、かうやうにもあるべしとも思ひしには似もよらず格別に異り瀧の全体を譬へいはゞ力士の荒たる如く怖ろしく、眼とめて見ることもなるまじ、余の如き虛弱のものは神氣も遠しくなるべしと思ひ居しに、さはなくて、瀧の全体の趣をたとへいはば、美人の薄衣を着てたてるごときものなり』とある。瀧の高さも八十餘丈といふのは法螺で、五十

那智山一の瀧



丈餘しかないさうだ、水量もあまり多くはない。瀑壺といつたやうなものもなく、山も淺く谷も深くはない。世に聞いてゐるやうな雄大豪壯なものではないから、その積りでゆけば可なりい、瀧だ。瀧の下に【飛瀑神社】がある。瀑布を神体にした拜殿である。尙ほこの附近にもと不動堂及び千手觀音堂といつて、花山法皇が納め給ふた黃金佛を安置した堂や不動堂などがあつたのだが、ひどく頽廢したので明治十年毀つて本尊は青岸渡寺の本堂へ移してしまつた。この瀧から約八丁更に奥に進むと【那智山二の瀧】がある高さ十丈八尺幅三間、如意輪の瀧ともいふ。更にゆくと【三の瀧】がある。高さ七丈八尺、幅三間、かうして奥深く進むと所々に小さな瀑布が甚だ多くかゝつてゐる。俗に【那智の四十八瀧】といつてゐる。また三の瀧附近に【花山法皇御庵居の跡】といふのがある。法皇はこゝで三年間幽棲したまひまたそこに櫻を植へて『木の下を棲み家とすればおのづから、花見る人になりぬべ

きかな』と詠ませたまふたといふ。その櫻は後に枯たが更に後に植へかへたものが今にのこつてゐる。先に千里の濱の條にも述べた通り、花山法皇は全く藤原兼道の計略にかゝつて御出家になつたもので、後にそれと氣づかれたので、法皇も殆ど自暴自棄のやうになられ、隨分御奇行が多かつた。この歌にもその御俤が窺はれるやうだ。那智から小雲取山の上り下り二百町といふ嶮を越へると

【本宮村】に出る。熊野川の上流、新宮から約七里のところにある。【熊野坐神社】の所在地である。この社は新宮、那智を合せて三山の稱のある宮で、しかも當社はその第一位に居るので、その所在地を『本宮』と名けられたのである。明治二十二年の大洪水で、當社は勿論、本宮一村殆ど全滅してしまつてその後復興されたものだが昔日の觀はない。今の殿舍は四あつて第一殿は伊弉冊尊、第二殿は速玉男之尊、第三殿は素盞男尊、第四殿は天照大神を奉祀してある。別に中四社、下四社の

八社があつて合せて十二社になつてゐる。この神社もまた歴代天皇の行幸數多度あつたので、中にも後白河法皇の如きは三十四度の御幸があつたといふ。

わするなよ雲はみやこをへだつとも、なれて久しき三熊野の月　後白河院

本宮村から南方約一里、四村字湯の峰に【湯峰温泉】がある。湯の峰川に添ふて湧いてゐるので、光明湯、玉の湯、小栗湯の三に分れてゐる。中にも小栗湯といふのは小栗判官が入湯したといふ傳説のある湯である。文武天皇以下數代に二十餘度の行幸のあつた湯だが、割合に世に知られてゐないのは交通の不便な故であらう。大和の十津川は本宮の上流から【熊野川】又は【新宮川】と稱せられてゐる。本宮から川を九里下ると【新宮町】に出る（陸路は七里）。本宮から新宮に下る熊野川の風光は頗る美しいもので、水はあまり清くないのと、兩岸が開けすぎてゐるなどの缺點はあるが、急湍の多いのと屈曲が頻繁で、風景の變化に富んでゐる點は頗る見

るべきものがある。屏風島、網代ケ淵、佛岩、三重岩、布引瀧、銚子口瀧、吹雪瀧などの奇景は名高いものだ。然し眞に熊野川の絶景を見るには、本宮から更に三里上流に遡つて【瀞八町】を見なければならぬ。

【瀞八町】　熊野川の支流、北山川に沿ふた多度村から玉置村の間凡そ八町の間で、實に紀伊の絶勝と稱せられてゐる。依岡三交は『耶馬溪も其の實この溪に及ばず』こまで激賞してゐる所である。この勝景が發見せられたのは明治以後のことで、石井三重縣知事が巡回の時に始めてこの勝を知り、大阪の藤澤南岳翁が此の地の遊記を書いてから急に天下に名を知られたのである。その文に曰ふ。

「一棹して崖を廻れば溪口峻崖數尋、屹立して門を作す。門の内左右石壁、直立千尺、項に稚松雜木を戴き一撮土なきものゝ如し。水は則ち深綠色。巨巖底をなすに似たり。深さ數十尋、測るべからざるなり。瀠々として流れず、舟子櫓を按じて緩々として進む。崖

壁幾曲觀、曲に隨ひて改まり崖岩盡く奇。その最も奇なるもの右崖は、跌石、蛭石、牌石、鷄冠石、大黑石、條石、左崖には、屏風石、船岩、洽門、釜洞皆觀るべし。之を要するに一巖一洞を以て論ずべきにあらず。蓋し左右の壁、奇狀萬殊相對して十數歩左凸すれば則ち右凹、一聳すれば則ち一伏し、呼應映發して自然に章をなす。仰げば則ち青天帶の如く、俯せば卽ち碧潭絕淨、恍として洞中に入るに似たり。土人呼で土呂となす。字、泥を用ゆ。方言に水流の緩漫なる者を泥となすといふ。その字雅ならず、故に余改めて洞溪に作る。洞川村の例に從ふなり」云々

特にこの勝だけを探らうとするものは本宮を經てゆくよりも木の本港から上る方が便利だ。詳しくは同港の條參照。本宮附近の案内を書いた道の順から云へば次は熊野川を下つて新宮へ出るべきであるが、勝浦から新宮までの海岸には尙ほ見るべき所があるから再び海岸に戻つて記述する。

【濱の宮】 那智川の川口、那智村にある。神武天皇が熊野荒坂津（今の二色といひ又二木島港の事ともいふ）の丹敷戸畔を誅したまふた時行宮を置かせられた所といふ。欽明天皇二十四年の創建といひ古くは渚の宮といつた。

よもすがら沖の鈴鴨羽ふりして、渚の宮にきれつゞみうつ　　源仲正

濱の宮の傍に【補陀落寺】がある。天臺宗でもこは濱の宮の供僧坊であつたといふ。『日本第一補陀落寺』とした額がかゝつてあるが、これは文武天皇の宸筆と傳へてゐる。本尊は千手觀音、本堂は五間四面寶形造で、今の建物は文化四年に改築されたものだ。巡禮歌で名高い『補陀落やきしうつ浪は三熊野の、那智の御山にひゞく瀧つ瀨』といふのは、花山法皇が補陀落寺で詠ませたまふた御歌だと稱してゐるがこんな拙い腰折れ歌が法皇の御製だとは信じられぬ。濱の宮の海岸はむかし錦浦といひ今もなほ赤色浦といふ。平家物語や源平盛衰記にこの濱から維盛が入水した

事が見ゐてゐる。而も維盛は眞に入水したのではなく色川村（今の那智村字色川）に遁れたと傳へ、同村の清水某といふのはその後裔だと稱してゐる。それが淨瑠璃の千本櫻では吉野へ遁れて鮨屋の彌助になつてゐる。また濱の宮の海岸から西へ約一里、【佐野】の海岸は風景の頗る美しい所で、この濱の石は、那智の黑石といつて碁石や試金石に用ひられるので名高い。

忘るなよ松の葉ごしに波かけて、夜ふかく出でし佐野の月かげ　後鳥羽院御製

【三輪崎町】　新宮町から一里を隔てた海岸にある港で、捕鯨業の盛んな所である。新宮町は海が淺く港としては不適當で、卽ち三輪崎がその附屬港として交通運輸の要衝になつてゐる。

【新宮町】　熊野川の河口にある人口二萬に近い大邑である。熊野三山の一なる【熊野速玉神社】は町の北部にある。歷朝の尊敬篤かつたことは屢々行幸啓のあつたので知られる。中にも平城天皇は五回、鳥羽天皇は八回、後白河天皇は十五回この社に行幸になつた。舊來の社殿は明治十七年に灰燼に歸し、今の建物は明治二十七年に再建せられたものだ。寶庫だけは火事に燒けなかつたので古い神寶古文書等何れも現存してゐる。神輿一臺、神幸用船一艘、その他二十六點の神寶が明治三十一年に國寶に列せられた。

後鳥羽院熊野にまゐらせたまひける時、

露おかぬ南の海の濱ひさし、ひさしくのこる秋のしら菊　藤原定家

神社の南八丁に【神倉山】がある。山頂に大きな石があるが古史に天磐盾と見ゐてゐるのがそれである。熊野速玉神社は最も古くはこゝにあつたといふ。また神社の東字上熊野には【阿須賀神社】がある。これは速玉神社の攝社で、この社の神寶類十四種が國寶になつてゐる。

【新宮城趾】 新宮町の西にある。源平の頃新宮十郎義盛の居城で、徳川時代には水野氏一萬五千石の居城になつてゐた。城趾の東海岸、字熊野地の田圃の中に【秦徐福の墓】がある。徳川頼宣が建てたものだ。徐福といふ男は秦の始皇帝の命により不老不死の藥を求むと稱して童男童女五百人を率ひて支那を發し、遂に日本紀伊國の海岸に流れついてそこで一生を送つた。

【木の本町】 南紀屈指の大邑で、南海航路の一要港になつてゐる。西南五丁の海邊に【花の窟】といふのがある。こゝは日本書記にあげられてある一書に伊弉冉尊の御陵墓と記されてあるが詳でない。大きさ二十七間の巨巖が壁立してゐる所で上方に五尺四面の洞がある。こゝで毎年二月二日と十月二日に洞の前へ長い木綿の繩をかけ無數の花をくゝりつけて祭をする。花の窟の名がそれから起つた。

みくまのゝ御濱によする夕浪は、花のいはやのこれぞ白木綿　山家集

木の本町の東に【清水寺】がある。又西北花城山には高さ二十間幅十二間の大岩に橘南谿の詩を刻した【文字岩】がある。前記濤八町の勝を探るには木の本からする方が便利だ。先づ木の本から西約五里、有井村、井戸神川村等を經て【花知】へ出る。こゝは濤八町の上流で、また頗る勝景の所である。そこから船で下り濤八町を過ぎて木津呂村に出る。更に一里下ると小川口といふ所で、ここは木の本町から約八里、車が通じてゐるから容易に町へ戻ることが出來る。また或は本宮へ出て新宮或は那智を廻つて再び海岸へ出るも順であらう。

【二木島港】 鰹鮪等の漁業の盛んな所で、附近賀田、古江、三木里等の海濱は風光が頗る明媚である。

【尾鷲町】 北牟妻郡第一の大邑で、大阪熟田航路汽船が寄港する。こゝから輸出される杉檜は尾鷲材といつて世に名高いものだ。

【引本町】須賀利港附近の小邑である。大和アルプスで名高い大臺ケ原を貫通する道はこゝへ續いてゐる大臺ケ原登山の條參照。

淡路島巡り

淡路島は我國の神話時代から有名な島である。古事記に伊弉諾伊弉冉兩神が國土を產みたまふた條に『淡路之穗之狹別島』と見えてゐる。淡路といふのは實は後世の名で、この島の舊名は穗之狹別島といつたのだが、神武天皇大和に都せられてより、この島は粟の國、卽ち今の四國の阿波へわたる交通の要衝になつてゐたので、粟へゆく路卽ち粟路が今日の名になつたのである。古事記が編まれた時代にはもう穗之狹別島といつても、人にわからなかつたので特に淡路之穗之狹別と書かれたのだ。それはさて置き、大阪灣の口をふさいで長々と寢そべつてゐるこの島の風姿は穩かな瀨戸內海の風光に一層の穩かさを添へてゐるやうだ。その周圍約三十六里、島としては可なり大きい方だが、琵琶湖の中へ入れたら、沖の方で浮いてゐる位なものだ。島中名勝に富んでゐるが、從來は交通が不便であつたためにあまり人に知

られなかつた。近來はその便が開けたので大分世に知られるやうになつた。左にその大略を記さう

【洲本附近】 洲本町は淡路島の東海岸にある本島の首邑である。交通は大阪から瀘船で約五時間、南海鐵道淡輪驛から瀘船で約三十分の行程である。便利の上からいふと淡輪からゆく方がいゝ、南海鐵道ではその連絡切符を發賣してゐる。この連絡の海上は風光極めて明媚で由良海峽を扼する【友ケ島】の繪のやうな風景なぞ手に取るやうに見ることが出來る。洲本町は蜂須

洲本大濱公園全景

淡路岩屋繪の島

賀氏の家老福田氏六萬石の舊城下である、町の西方にその城趾がある。その西に【三熊山】が聳ゆてゐる。嶺は乙熊、高熊、虎熊の三にわかれてゐるので、これを總稱して三熊山といふのである。またこゝは元龜天正の頃脇坂安治が城を築いた所といふので城山ともいつてゐる。非常に眺望のいゝ所で近年これを公園にして競馬場などが設けられた。洲本港の南は【大濱公園】又は【三熊公園】といつて風景の美を以て鳴る所だ。近年この附近の海水浴が盛んになつて俄に名を得た。大濱公園の南數丁に

【四洲園】がある。個人經營の遊園地であるが頗る風致に富んだ所で、園内にラヂウム温泉生簀などの設備があつて一日の清遊に最も適してゐる。その西に【住吉神社】がある。町の中央に【洲本神社】がある。市杵島姫を祭つた社で、官幣大社伊弉諾神社(後に述ぶ)の攝社になつてゐる。毎年の秋祭りは淡路第一の大祭で、參拜者が雲集する。

【千光寺】洲本町より西北約二里、加茂村内膳先山の頂上にある。一に清淨皇院ともいひ、本島第一の名刹である。千光寺の北麓から約一里河上村に【河上神社】がある。縣社で土地の土産神だ。

【幡多】洲本より約四里、伊弉諾伊弉冉二神が瑕馭廬島に降り住みたまふたと古記に見えてゐるのは、卽ちこの地のことであると傳へ、幡多にはその聲地と稱する丘の上に兩神を祀つてある。蓋し便りないものだ。

【淡路陵】洲本より四里、加集村字加集にある。淳仁天皇及びその御生母を鎭めた御陵である。

【沼島】加集より更に南二里、灘村字芳野の沖にある周圍二里餘の一孤島である。先に記した伊弉諾伊弉冉兩神の降臨あつた瑕馭廬島は實はこの島のことであるともいはれてゐる。

【岩屋】洲本の西北方、播州の明石に對した海岸の地で、この附近の名勝は東海道線明石驛の條に詳しく記したから略する。

【伊弉諾神社】洲本から西北三里半、多賀村

阿波大鳴門の潮流と公園

にある官幣大社で早良親王を祀つてある。親王は罪を得てこの地に流されたまふたので、御墓はその東南五丁にある。神社から西十丁、郡家から南方へ約二里の間の海岸を【五色の濱】といつて、遠く播摩洋を隔て、小豆島を望む風光絶佳の地である。

【福良町】　洲本から西方約六里、福良灣に臨んだ地で、畑島が灣の口をふさいでゐるので湖水のやうに見ゐる風景のいゝところだ。こゝから西一里餘ゆくと【鳴戸崎】がある。

【鳴戸海峽】　鳴戸崎と阿波の孫岬が、僅かに一哩程隔てゝ相對してゐる極めて細い海峽である。こゝの海水の落湊は天下の奇觀として世に響ひてゐる。『阿波の鳴戸』といつて鳴戸といへば阿波にゆかなければ見ゐないやうに思つてゐる人もあるが、海水の落湊は鳴戸崎から見る方が却て壯觀だ。この湊落といふのは、紀伊水道の海

水と瀬戸内海の播摩洋の海水が、出潮干汐の加減によつて、この海峽を驚くべき速力をもつて流れこみ流れ出る際に起る水の大きな渦である。この海峽の潮流の早いことは日本一と稱せられてゐるが、出潮干潮交代の前後一時間の如きは實に一時間七浬乃至八浬の速力に達する。その時潮流の兩側は大きさ七八間の大渦が轟々として物凄い音をたてながら一面にあらはれる。その壯觀は到底こゝに述べ盡すことが出來ない。

瀬戸内海巡り　附、別府＝耶馬溪＝宇佐八幡。

瀬戸内海の風光の美は、恐らく世界的の名を博してゐるこいつて差支はないであらう。我國に來遊する外人で、日本の印象を云爲するものは誰でも先づこの海の美を第一にいふ。然しそれは單に下の關から神戸大阪まで航行して來る海の上からの大觀だけで、既にそれだけの賞讃を博してゐるので、もし更に細かく觀るならばあらゆる山、水、家、その他の事々物々の悉くが、彼等の驚嘆に値すべきものであるであらう。外國人は兎に角、我國人の中でも内海の美に關して大体の輪廓だけの事は知つてゐる人もあるであらうが細かな所まで觀た人はあまり數多くはないやうだ。左にその大略を紹介する。但し、細かにこいつた所で、地理學的に詳細な見物をすることは、餘程の時間こ費用こに餘裕のある人でなければ到底不可能であるから、この項では極めて著名な所だけの案内に止めた。

先づ内海巡りの第一歩は大阪又は神戸から船に乘るべきである。船は大阪商船會社の紅丸こいふのが巡覽船で最も適してゐる。須磨舞子の繪のやうな風光を右に眺めて、明石海峽の迫つた水道を過ぎるこ俄に海が廣くなる。

寒霞溪石門堂

そこから即ち【播摩灘】である。船はやがて【小豆島】の坂手に着する。遊客は先づこゝで上陸して小豆島の名勝を探らねばならぬ。この島の名勝こいふのは即ち世に名高い寒霞溪のこゝである。

【寒霞溪】　寒霞溪といふ名は實は文人墨客が洒落てつけた名で、本名は神懸山といふので、奇巖怪石重疊たる所である。その狀は岡本黃石がうまく書いてゐるから、左に之を譯して（原漢文）說明にかへる。

『五步觀を改め、十步狀を異にす、一峰末だ移らざるに一峰又出づ、更に一峰あり、その後よりして之を彌縫し、合して一峰をなす、峰上に安峰あり、人の帽を戴けるが如し、金石峰をなして寸土を帶びざるものあり、峰腹空洞にして中に數松樹を抱へたるものあり、上は豐にして下は殺て崩れんと欲して未だ崩れざる如きものあり。突怒として將に相鬪はんとせる如きものあり。離れ立ちて、恰も座を離れて之に往かんとせる如きものあり。或は俛れ或は仰ぎ、或は起き或は臥し、或は欹ち或は反り、或は橫に或は斜に、終に一さして形を同じくせるものなし』云々

これはその奇岩續出して千態萬狀を極めてゐる樣を書いてゐるのである。この間に

溪の水潺々として流れ、溪にのぞんで數萬株の楓が枝を參差してゐる。その紅葉の美は實際筆舌の盡し得る限ではない。殊に絕勝の地は表十二景、裏七景なご稱してゐる。

寒霞溪の探勝を終つたならば坂手に戻り、再び船に乘つて對岸の讃岐高松へ渡り、陸路を鐵道で丸龜を經て多度津へ出、金毘羅に參詣し再び多度津から船で備後の鞆の津へ渡るのが順序である。若し時日に餘裕のある人ならば小豆島へ來た序に備前の岡山を訪ふべきであるが、もし岡山を訪ふなれば、小豆島から高松へ渡つてしまふよりも先に多度津へ直行して高松へ戻つて岡山へ渡る方が先で便利がいゝ。左に岡山へ渡るものとして順路を說いてゆかう。

【多度津】　中國交通の要衝に當つてゐる港で、名高い金比羅詣りはこゝから上陸すべきである。多度津から金比羅へ鐵道の便がある。金比羅へゆく途中で是非見

るべきは

【善通寺】　であらう(善通寺驛下車)弘法大師の誕生地として世に名高い寺で、讃岐第一の巨刹である。寺は卽ち大師の父善通の邸園の跡であるといふ。弘法大師が父母の追善のために建立し、父の名をとつて善通寺と號し、また自分の誕生地といふので、誕生院と號したと傳へてゐる。この寺の寶物中空海將來といふ金銅錫杖、木彫地藏菩薩及吉祥天、繪畫紙本淡彩一字一佛佛法蓮華經序品一卷、なぞ何れも國寶になつてゐる。

【金刀比羅宮】　琴平山(又は象頭山ともいふ)の中腹にある。(汽車は琴平驛下車、琴平町より神社まで約十町)今の本殿は明治十一年に造營されたものだが、用材はすべて節なしの檜を用ひ、壁板天井に櫻の蒔繪を描き、實に燦然たるものである。この社の祭神は昔から頗る要領を得ない神樣で、一說には素盞男尊といひ、また三

輪明神ともいひ、雲氣の神なぞいふ神樣のやうにも傳はつてゐる。また或は崇德上皇を祭つたのであるが、朝家を憚つて金毘羅と稱したといふ說もある。神道の方では甚だ要領を得ぬが、佛敎の方で金毘羅といふと、印度の神樣で佛法の守護神である。後の琴平山を象頭山といふのは印度の王舍城の山の名で、この神社が神道よりも佛敎に緣の深いことがわかる。尤も昔は神佛合体で、維新前まで象頭山金毘羅大權現といつて桃園天皇の世勅願所となり、日本一社の綸旨を賜つた

讃岐金刀比羅旭社

こいふ。明治六年に神社に編入せられ後國幣中社に列せられた。然らばその祭神は こいふこと先に述べた通り神道にしては要領を得ないし、佛教の方へひきつけること神社こいへなくなるし、一寸都合の悪い神様だ。所でこの社が航海の神として昔から世人が甚だ尊崇したものだが、これも何の神様が航海に縁があるかさつぱりわからないさうだ。金毘羅にしても崇徳上皇にしても三輪明神（大物主神）にしても、素盞男尊にしても航海にさつぱり因縁がつかない或は印度の言葉で、金毘羅即ちクムビラこいふこと鰐魚の事であるから、それが日本で航海の神こいふ信仰を得たのかも知れぬこ説いてゐる學者がある。それは兎に角、航海の神としての信仰は今に至つて尚ほ盛んなもので、參詣者が絶えない。大祭は十月で、極めて古雅な、且つ非常に立派な祭典が執行される。

金毘羅から再び多度津へ戻つて讃岐線で丸龜を經て高松へ出るべきである。

【高松附近】 高松市は即ち香川縣廳の所在地である。市中で見るべき所は【興正寺別院】【淨願寺】【法泉寺】【高松城趾】【高松築港】等あるが、見落してはならぬのは【栗林公園】である。市内常盤橋から通じてゐる琴平街道を南へ約十五丁、高松市内電車が通じてゐる。こゝはもこ藩祖松平頼重が遊覽所こして造つたものである。面積凡そ十六萬千百餘坪、西湖、南湖、北湖、涵養池、その他所謂『六大水局』飛來峰、巾子峰、旌丘、回中、その他所謂『十三天山坡』がある。梅林あり橘園あり

栗林公園五葉松

日暮亭、黒松林、百花園、修竹園、掬月亭、初莚館、なご、園中の名勝は數ふるに遑がない。實に日本有數の大公園である。水戸の常磐公園、金澤の兼六公園、岡山の後樂園の三を日本三公園と稱せられてゐるが、水戸の常磐公園の如きはこの栗林公園に遠く及ばない。所謂日本三公園は常磐公園を除いて栗林公園にかへるべきであらう。

高知市を訪ふものは栗林公園ここもに見のがすべからざるものは【屋島山】であらう。高松驛から東約一里半、西潟元から更に十丁登ると屋島山の頂上である。この頂上に【屋島寺】がある。天平勝寶六年草創、弘法大師の再建といふ古刹で四國八十八ヶ所の第八十四番の札所である。この上からの眺望は實に絶佳なもので、前に雄木島、雌木島など大小の島々が碁布してゐる。むかうに糢糊として連つてゐるのは山陽道の連山である。天氣のいゝ日には大阪の川口がこゝから見ゐるといはれてゐる。右の方に見ゐる海岸が卽ち源平合戰に平家の一門が沒落した【檀の浦】である。寺から東へ下りるとこの浦へ出られる。附近に那須與市が扇の的を射たといふ【駒立石】【安德帝行在所趾】【佐藤繼信の墓】などがある。

高松からは再び船で、今度は山陽道方面に向ふべきである。先づ、【宇野】で上陸して宇野線によつて岡山に向ふ。

【岡山市】 池田氏三十二萬石の舊城下で山陽道交通の要衝であることは人のよく知る所だ。市中で見るべき所は【岡山城趾】【後樂園】【準成閣】等何れも勝景に富んだ地で、寺では【岡山寺】といふ天臺宗の巨刹がある。それよりも見落してはならないものは日本三公園の一なる【後樂園】である。岡山驛の東十二丁、旭川の東にある。貞享四年池田綱政が之を開いたもので、昔は御茶屋敷といひ、後に後園と名けてあつたのを維新後池田家から公園に寄附して後樂園と命名せられたのである。

園の面積二萬七十餘坪、泉石の雅趣風景の美實に三公園の名に背かない。鶴鳴館、延養亭皇湖閣、花葉、茂松庵、簾池軒、流店、梅林利休堂、花交の瀧、島の茶屋、新亭なご見るべき所は非常に多い。

岡山からは船で、鞆の津へゆくか、或は山陽線によつて福山驛で鞆輕鐵にのりかへて鞆の津に出るべきである。

【鞆の津】 即ち今の鞆町のことである。神功皇后征韓の御歸途糸崎からこゝに渡り鞆を納め給ふたので鞆の津の名が起つたといふ。こ

備後鞆港阿武兎岬の觀音堂

鞆の津